
D E A T H G A M E をもう1度

いのいち

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

DEATH GAMEをもう一度

【NZコード】

N4443R

【作者名】

いのいち

【あらすじ】

ただいま、改訂作業中。

VR世界の誕生（前書き）

改訂版、導入部投稿です。

細かい調整はこれからもしていくますが、大幅な改訂はしないつもりです。

投稿済みの話は段々と導入部にあわせた風に改訂していきます。まあ、システムとかの方がメインなのでストーリー的な変化はそれ程ない…はずです。

VR世界の誕生

人の技術の進歩は、同時に電子世界という人の手で作られた世界を誕生させた。現実とは隔離されたその世界で人はアバターといつ自分が操作する分身ともいえる存在を操作することでのみその世界を味わえた。

しかし、作られた世界である電子世界においては現実では不可能であるようなことでも、可能だった。

例をあげよう。例えば、空を飛ぶなんてことは現実にはできやしない。いずれできるようになつたとしても、その背中には邪魔とか言いようのない大きな装置があるだろうし、小回りなど効かない自由なものだ。

だが、電子世界でのアバターは違う。そのアバターが存在する電子世界においてのルールとは人が決めるものであり、プログラマーがそういうシステムを作ったのならばそのアバターが飛ぶことには何の生涯すらない。

ただ、飛ぶのに抵抗があるなら背中に羽を生やしてもいい。現実ではたとえ羽があったとしても、筋力などの様々な問題から飛ぶのは困難だろう。

が、電子世界では違う。羽があるから飛べる、で済んでしまうのだ。理不尽だろう。だが、それが創造主たるプログラマーによって決められたプログラム……それが世界のルールとなるのだ。

人の手により創られた現実以上の魅力を持つことを許された世界。そんな世界にはアバターを通した操作という形ではなく、もっと近い形での体感を夢見ていく。

その理想形はすでに物語の中では紡がれていた。VR空間という、自身の全てを電子世界へと投影する技術。

ヴァーチャル

学者という存在の中には『無理』『不可能』『有り得ない』と言われるような技術を盲目的に『可能』と思いつだひたすらに研究をするすめる人物がいる。

そんな学者の中の1人がVR技術というものに興味を持ち、片手間に研究を始めた。最初は片手間だった研究はいつしか『彼』にとっての専攻となっていた。

専攻ではなくとも、興味を示し協力してくれる仲間たちも出来ていく。彼らとて本気で可能と思っている訳ではなかつたが、それでも夢見てしまう。

元来、先を夢を見据えるからこそその研究。今を生きるものにとつては当たり前のことすら昔は有り得なかつた。ならば、今有り得ないことすら未来には当たり前になるのでは。

皆が皆というわけではなかつたがそう夢見ている研究者も確かに居た。

結果から言えば彼らの努力は報われた。全てが思い通りにいつたわけではなく、偶然の結果が味方したこともあるが、それでも彼らの努力は本物だつたし、結果として偉業ともいえることを成し遂げたわけだ。

ただこの時点では完成品なんて言えたものではなく、夢見た完成像からは遠いものだつた。

だが、この技術は人類の更なる発展を与えるのは確かであり、この基礎が出来上がった時点でバックスポンサーという点では不自由はしなくなる。

そして、更に規模が大きくなつた研究チームは徐々にではあるが

確実に物語の中についたVR空間の理想形へと近づいていった。

最初に公開されたVR空間においてはいわゆる五感のうちの嗅覚、味覚は搭載されていなかった。電子世界にリアルを求める上では必要不可欠な存在はあるが、他の視覚、触覚、聴覚に比べれば必要性はどうしても落ちてしまう。

開発者たちからすれば、完全な状態での公開をしたかったのだろうが、この時点で世界中が注目する技術であり、一刻も早い実用化が望まれており、世間の声に耐え切れなくなつた形での発表となつた。

技術面はしっかりと確立され、安全性も確認されていた、ということが決断に踏み切った理由の一つだろう。

完全な形での公開こそ出来なかつたが、それでも当初の目的、VR空間への自身の投影を可能にする、歴史的大発明であった。

この後に嗅覚、味覚の実装をも目指したVR技術の開発は進んでいく。

さて、この2つの実装については大きな問題が立ちはだかる。この2つについては個人の嗜好の差が激しい。その嗜好の差の再現は難題といつてよかつた。

音（聴覚）とて人によって好みの差はある。心地よい音、不快な音。だが、これは万人が同じ条件だ。

例えば、工事が行われていればその工事音は不快なうるさい音だと感じる人が多いだろうが、中にはその音が気に入る人もいるだろう。音とは個人の嗜好と関係なく存在している。

それに比べて、嗅覚、味覚は聽覚というものは選り好みという要素が強くなつてくる。気に入らない音に関しては遮断、もしくは防音による音の大きさ自体の軽減をすればいい。現実では完全な遮断など無理だし、防音に関しても簡単にはいかないが、VR世界では設定1つでそれが可能となる。

ただ、VR世界においても音とは重要な情報源の1つとなる為にそれに制限をかけるということは相応のリスクが付き纏う。もちろん、嗅覚、味覚から得られる情報とてしつかりとあるが、初期の段階での実装がなかつたということもあり、最初期から作られたVR空間にはその2つに依存しないように作られ、風潮としては情報源として実装ではなくより娛樂的な方面での実装を望む声が強くなつていた。

それに応えるようなシステムの開発も同時に行われる」となる。例えば、香水などは大きく分けると2つの意味がある。自分の為か、他人の為かである。

自分が気に入った匂いがする香水があつたならばその匂いを嗅ぎ続けることで自身はリラックス効果を得るだろうが、よくいる人にとってその匂いは不快なものである可能性は否定できない。

逆に、他の人の心象をよくするように香水をつけていたとしても自身がその匂いをそれほど好まないなんてこともあるだろう。

ただ、現実においては匂いの発信源が変わらない以上は自分、他人が感じる匂いは変わらない。どちらも満足する結果になるとは限らない。

だが、どちらも満足するような結果をもたらすことがVR世界では可能だった。香水において、VR世界で実装を目指されて2つの解決策。

1つは自分が感じる匂いと、他人が感じる匂いを変えるようにシステムをいじくることであり、もう1つが香水などの特定の匂いの発信源に対して、無臭に変換あるいは自分が指定した匂いにすると

いうシステムである。

ただ、これらは全ての匂いに対応して行えるものではなく、香水などの娛樂的要素が強いものなど限定的なものにしか対応していない。これは匂いというのも重要な情報源であるからして、匂いイコール情報となる場合はそれを阻害してしまう結果になるからである。

そして、嗅覚、味覚が実装が可能になつた頃には世間にもVR技術というものは広く流布していた。

この時点でも感を再現することにして、VR世界の基礎は完成を見たといって言い。

だが、それでは満足しなかつた人物がいた。

彼はVR技術の開発を本格的に始めた人物であり、結局は開発を始めた後はその人生の全てをVR技術に費やしていた。彼は誰もが認めるこの技術の第一人者だった。

そして、VR世界を最も現実を再現しようと固執していた人物である。

「まだだ。五感を再現したならば、次は……」

彼は老いていた。人ならば決して避けられない運命に彼は近づいていた。

進化を求められるVR世界

VR技術がもたらした世界の発展は誰もが認める事であり、世に馴染むのも時間がかからなかった。

その中でもっともVR技術が貢献したといわれるのがIFのミニュレーションである。もじゅ

例えば、地震、噴火などの災害が起こった際に間違った行動を取ればそれは命取りとなるが、現実には災害が起こるまではどうなるか予想して心構えをすることぐらいしかできない。

まさか訓練のために地殻に振動を与えて、あえて巨大な地震を起こすなんて事はできないし、噴火にしても、何かしらの方法でマグマを活性化させて噴火させようものならそれはすでに天災ではなく、人災といつていい。

だが、VR空間ではそういうた現実の被害はなく起こった後の訓練すらも可能となる。これは実際に災害が起きたときの対処ができるという点では大きな成果をもたらしていた。

もし、シミュレートの中で自身が死んでしまったとしても現実では生きているのだから、何が悪かったのか考察できるし、それは実際に災害が起きたときに大きな経験となる。

だが、VR技術がもたらしたのは発展だけではなく、相応の事故、事件とて起こっている。

レジスタンス・オンライン（Resistance・Online）というタイトルのVR空間を利用したMMORPG（多人数同時加型オンラインRPG）はその最たる例だろう。

ログアウト不能の事態におちいった同タイトルは悲劇はそれだけに終わらず、ログイン状態にある人の死亡が次々と確認された。

死亡する人に関連性はなかつたが、調査の結果、レジスタンス・オンライン（通称レジイ）内で死亡判定を受けることにより現実でも死亡することが確認された。

この事件は結局のところ、現実からの解決は叶わず、レジイ内のゲームクリアを持つて悲劇に幕をおろすこととなつた。

この時点ではVR世界史上最悪の出来事と呼ばれていた。

VR世界は宇宙に例えるならばそこを作られるVR空間は星だ。
とは言つても星ごとにベース^{ソフ}となる。

どういったVR空間を作りたいのかそれに合わせてベースとなるVR空間の核^{ベース}を買う。何社せいのものはグラフィックが綺麗だが、VR空間内での動きがスマーズでないとか。かと言えば他の会社のものでは動きにほころびは少ないが、色彩が鮮やかではないとか。一長一短だつたりするものだつた。総じて高い再現度を誇る核はそれだけ値を張つてしまつが、それ以上に維持にも手間がかかつてしまつ。

だが、何事にも例外が存在するもので目の前にある核^{ベース}は全てのもので高水準な数値を示すまさに最高といつていゝものだつた。

VR空間の管理者たちが頭を悩ます維持という観点から見ても、

人の手が入らなくとも1年近くも問題なく動き続けたという実績は信じられないものだつた。

いや、正確に言えば人の手が加えられない状態だつた訳だが。

「……やはり、『テリートするべきだと思います』

「^{ベース}この核があればVR技術は更なる飛躍的進歩を遂げるだろうが、若い技術者にとってはそれは許容できることだつた。

「何故だね？この核^{ベース}が量産することが可能ならVR世界は今まで以上に可能性を持つた世界に生まれ変わると言つたのに」

だが、VR技術の権威といつてもいい老齢に差しかかろうとする技術者にとって果てしなく魅力的なものだつた。彼が長年の間研究し、求め続けたものが目の前にあるというのだから。

「おっしゃることはわかります。ですが！この核^{ベース}は死すらも再現しているじゃないですか」

「確かに君の危惧していることもわかる。この核^{ベース}を元に作られたレジスタンス・オンラインのような出来事がまた起ころのではないかという不安な気持ちもね」

皮肉なことに最悪と呼ばれているVR空間は同時に、最も理想形に近いVR空間でもあつた。

「だがね、この核に刻み込まれた死のプログラムを取り除けば何の問題もないではないか。今はまだ芳しい成果は上がっていないが、それも時間の問題だろ？」

「この核^{ベース}の有用さはわかりますが、研究を続いている間はVR世界にずっとレジスタンス・オンラインの世界が存在していることにな

るんですよー？その危険性がわからぬはずはないでしょー！？」

「全く、忌々しい事この上ないね。ゲームが終わつた後もこの世界は外からの干渉を拒み続けている。おかげで私たちが選ぶことが出来るのは存在を残し続けるか、それとも核諸共^{ベース}デリートしてしまつかを選ぶしかない」

「今なら、誰もログインしていない今ならばこのVR空間をデリートできます！」

「君の言い方だとまるで、この先誰かがログインするような言い振りではないかね？」

「それは……」

「そんなことは、有り得ない。そうだろう?..」

「……」

若い技術者にとっては訛然としないことだったが、彼とて技術者である以上は目の前の代物に興味はそそられる。そんな思いが2の句を繋げさせない。

「それに、君の言つレジスタンス・オンラインは核^{ベース}ごとすでにVR世界から消されているよ」

「えつー!?」

「ここにあるのは私が開発した新世代を担う核^{ベース}だ。…………ただし、死まで再現してしまうという重大な欠陥を抱えているがね。これは国も認めていいことだ」

「Jの核に実用化の目処が立てば、間違いなく開発に成功した国はVR技術の最先端を走る事になり、それがもたらす利益は莫大なものとなるだろーつ。

つまりは、その利益の為にこの研究は黙認され、事実は曲げられるといふことだ。

「君の懸念とて、この解析…いや、開発を終えてさえしまえばこの
世界には用がなくなる。どうなろうとも構わないのだよ。そして、
成功のあかつきには相応の報酬と名誉が得られるのだよー。」

若い技術者にも不安はあつたが、それでも技術者としての興味と
成功時の功績を鑑みればそれは甘美な魅力を持った研究だといえた。

「…………。わかりました、私たちの手で一刻も早い実用化を目指し
ましょー！」

一刻も早い開発こそが、この最悪なVR空間を早くに消し去る最
良の方法だと自分に言い聞かせ若い技術者は年老いた技術者に協力
する決心をするのだった。

I-F^{もじも}が許されるならば、この時に戻つて違う選択を選びたい。
レジスタンス・オンライン・アゲイン^{レジスタンス・オンライン}
新たな事件が起きた時に若い技術者はそう悲しそうに呟いた。

戻ってきた日常

田覚まし時計を止めることが出来ることが幸せを覚えながら佐久間拓海の一 日は始まる。

1年前の彼にとつては起床を告げるのは田覚まし時計などではなくシステムに設定された時間によつて意識が覚醒させられる生活をしていた。それこそ元来は田覚めが悪い拓海にとつてもすぐに動き回れるほどにはつきりとした意識でだ。

そんな田覚めを体験していたのは現実などではなくVRMMOと呼ばれるゲーム世界でのことだった。

VRMMOが当たり前の様に世を賑わせている近年においては『レジスタンス・オンライン』は比較的だが注目を受けていたタイトルであり、楽しみにしていた人物が多かつたのもまた事実だった。

レジスタンス・オンライン（通称・レジイ）このゲームの特徴は出発点以外の都市がすでに魔王軍によつて制圧されていることだろう。

出発点として用意されている6つの都市のいづれからゲームを始める事になるのだがプレイヤーの任意では選べずにただAIが人数がバランスよくなるように割り振る。

プレイヤーたちはその6つの都市を守りながら、魔王軍に制圧された都市を解放する為に進軍していく。

このゲームの難しいところはただ攻めるだけではダメだということで、守りを疎かにしていると何時の間にやら魔王軍によつて制圧され直されており周りを見渡せば魔物、魔獣がひしめき合つてゐることもある。

攻めと守りの両立こそが大切と公式ホームページには宣伝されていた。

だからこそ被害者が多くなつた。仮想空間で約1年にも渡る死のゲームをプレイする羽目になる人が。

このゲームはとんだ地雷だった。面白い面白くないという次元の話ではなく、ゲーム世界への幽閉とゲーム世界での死亡が現実世界の死へと直結する小説の世界でしかないわゆる『DEATH GAME』だった。

拓海もそんな被害者の一人で死の恐怖と隣り合わせの中でゲームクリアを目指して日夜レベルアップに勤しんでいた。

そんな努力が報われたのか拓海はトッププレイヤーの一人となり最後の戦いとなる魔王との決戦にも参加できるほどのプレイヤーとなる。

そして、その決戦に勝利し現実世界に戻つてこられたのは半年ほど前のことだった。

ゲームクリアが現実に与えてくれた報酬とは留年という望んでもいないものだけだったが、そこで得た仲間は今でも大切な存在といえる。

比喩ではなく命を預けあつた仲なのであるから、中学からつるんでいる連中を一足飛ばしにして一番の親友といえる。

残念なことに現実では一度も会つたことがないが、機会があれば拓海は会つてみたいと思っている。

しかし、言い出すきっかけが掴めずにオフ会の機会は訪れずに入る。心中では誰か言い出してくれてもいいのにとか思いながらチヤットルームで色々なことを遅くまで語つていてことなどもう珍しくも何とも無い日常の一部へとなつていた。

現実に戻つた後は衰えた筋力の回復のためのリハビリも待つており、毎日学校に通えるようになったのはつい最近のことだ。

手付かずだった勉強も辛いのだが一番に辛いのは今まで同級生だ

つた奴らを学校では先輩呼ばわりしないといけない事か。今は同級生で過去は後輩だった奴らとの「ミコニケーションも中々に骨が折れて一苦労だ。

ゲーム人口的には同級生に1人や2人、学校全体で同じ苦しみを味わっている人が5人くらいいてもいいのではないかと思うが幸いというべきか拓海が通う高校からの被害者は彼1人だけである。

それでも、死亡者がでていなかつただけまだマシだと思わないと言つていけない。ネットで死亡者がでた高校に通う元プレイヤーによると空気が重過ぎる、との書き込みがあつた。

それも当然のことなのだろう。同じ被害者なのに1人は生きて1人は死ぬ。生還者からすればそれは現実に戻つたとしても学校では喜ぶということは同時に死んだ1人に対しても義理を欠くことになる。それは間違いなくやりづらいだろうと他人事でよかつたなんてことを思つたのを拓海は覚えている。

『では、引き続きニュースをお伝えします』

階段下りて、朝食を食べようとダイニングルームへと足を運ぶと父親がつけているのかテレビの音が聞こえてきていた。

そこで拓海は表情は苦いものへと様変わりをするのが、自分自身でもよくわかつた。

別に父親との関係が冷え切つてているということではない。むしろ、家族仲は良好といえるし、拓海自身は父親を尊敬すらしている。

現実に戻つたときの父親の、母親の、兄の、その笑顔は拓海の脳裏にしつかりと焼き付けられていたし、それがゲームクリアの最高の報酬だと本気で思つていたときも一時期ではあるがあつた。

それでも、拓海が顔をしかめる理由はテレビにある。誤解しないように言つておくが拓海自身はテレビをよく見るし、好きと言つても過言ではない。

だがしかし、ニュースだけは話が別になる。普通のニュースなら

構わないのだが、最近のニュースの中心はここ1ヶ月変わらずに同じニュースだ。

それも拓海の　いや、レジスタンス・オンラインの被害者の琴線の触れるような。

『では、今日もまずは史上最悪のVRMMOと呼ばれ、10万人以上のプレイヤーが閉じ込められているレジスタンス・オンライン・アゲインについてのニュースです』

レジスタンス・オンラインというゲームは魔王を倒して世界に平和を取り戻すという、シナリオ的には王道なRPGだが、このゲームはMMOである限り魔王を倒した後の平和な世界とてヒローグではなく、1つのVR世界として続く。

そんな中でアイテムをコンプリートしたり、ヒヤリ込み要素がない訳ではないが、それでも物足りなさを覚えてしまう者もいるだろう。

そんなプレイヤーたちの為に用意されていたレジィのもつ一つの顔こそが『レジスタンス・オンライン・アゲイン』だった。

家庭用のRPGではゲームクリアした後にデータを引き継ぐとか、追加イベントがあつたり、難易度を設定したりのいわゆる周回プレイというものがあり、開発者たちは何を思ったのかMMORPGでもそれを用意してしまったのだった。

突入方法は魔王討伐後に新しいアカウントを作ると自動的にレジスタンス・オンライン・アゲイン（通称・ROA^{ロア}）の世界へと飛ばされる。

すでにレジィにアカウントを持つているプレイヤーに対しては2つ目のアカウントが作れるようになる。

ただ、このデスゲームとなってしまったレジィというゲームはクリアされた時点で新たにログインするものもなく、この世界は表に立つことはない……はずだった。

その日はVRMMORPGとしては輝かしい日になるはずだった。VRMMORPGタイトルの双璧とも呼ばれているタイトルの続編が同時にリリースされることで、今までのファンや、これを機に始めようとする新参者も沢山おり、VRMMORPGの歴史に新たな1ページが刻まれるはずであった。

しかし、刻まれた歴史は望んでいたものとは全くの逆のこととなってしまった。

レジスタンス・オンラインの悲劇と同じ様に再びログイン者が現実へとログアウトしない事実が突きつけられる。

そして、レジィの時と同様に次々と死亡者が確認された。

ただ、事件を起こした2つのタイトルにはログインしたものがないという不可思議な状態であった。

原因は分かつてしまえば簡単なものだつた。

VR世界というのはそのタイトルがあるVR空間へと直接行くわけではなく、まずはVR世界の入り口ともいわれる場所を経由してVR空間へと飛ばされる。

実際、時間的には錯覚できないぐらい僅かなことであるが、この入り口によつて飛ばされる先が決まるのだ。だからこそ、極めて稀な例ながらも行くはずではなかつたVR空間へと行つてしまつ、といふことも確認されている。

今回はそれが人為的におこされたから、大量の 10万人を超える被害者が生まれてしまった。

このニュースを聞くために眉を寄せるのは拓海ばかりではなく、レジィの元プレイヤーはほとんど全てがそうだらう。終わらせたはずの世界がまた再びと牙をむいてきたのだから。

とりあえず、今の拓海にとって重要なのは遠く世界に囚われてい

るプレイヤーではなく食事を田の前にお預けされていことなのだ。正直、あんな記憶の片隅へと封印しておきたい死と隣り合わせる世界のことなんて思い出したくも無いのに嫌でも思い出されてしまう。

要は、腹は空いているのに足が向かないだけの話なのだが。

「ん？ おお拓海か。おはよひ、すまんなチャンネルを今変える」

拓海に気づいた父親 やつひくじ 宗平が朝の挨拶とともにチャンネルを変えようとする。息子がこのニュースを好まないことはよく知っている。

まさに人事ではない大事件な訳なのだからそこにはいい感情を持たないのは簡単にわかる。

「おはよ。…いや、いいよ。そのままで」

逆に拓海としても宗平がこのニュースをどれだけ気にかけているかも良く知っていた。

まさに息子が囚われていた事件が再びなんてことになつたら、被害者の家族としての思いを知っているだけに続報が気になるのもまた当然のことといえる。

それに拓海自身としても学校では嫌でもこの話を振られるので、少しづつだが耐性をつけていかなければダメだとも思つている。

「いや、いい」

そういって宗平はチャンネルを変えた。朝の占いが行われていた。

「いいの？ 気になるんじゃ？」

「後で携帯からニュースサイトを見ればいい。食事中はあまり湿つ

ほくなるもんじゃない』

そんなことを父親に感謝の念を送りながらいつもの席へとつぶ。
佐久間家の朝の食卓は白いご飯と味噌汁が絶対に出てくる。いつ
ぞや兄 文也ふみやがパンが食べたいと言つたときには味噌汁の具にお
麩の代わりといわんばかりに食パンがちぎって入つていた。
宗平いわく、『別にパンだつて普通に食うが、朝だけは白いご飯
じゃなきゃいかん』といつているあたり何かしらのこだわりがある
のだろう。

今日も今日とて席に着くと母親 夕実ゆみがさっさとお茶碗に山盛
りに盛られた白米と味噌汁が運ばれてきた。佐久間家ではローテー
ションで味噌の種類が入れ替わり、今日は合わせ味噌で作られた味
噌汁だつた。

それと、食卓には自家製の漬物が並んでいる。今日はきゅうりの
糠漬けにきゅうりの浅漬け、オイキムチ。そして止めとばかりに瓜
揉みまでもが揃っていた。

そんな綺麗に1つのテーマに統一されている食卓をよそに拓海は
何もいわずに梅干を入れられている小瓶の蓋を開けたのだった。

「行つて来ます」

「はいはい、行つてらっしゃい」

朝食を取り終えるといつも通りに高校へと向ひ。この当たり前が
どれだけあり難いものかを拓海は理解している。

拓海だけではなく、かつて囚われていたプレイヤーならば多かれ
少なかれ感じ入ることだろう。

2年前は特に感じ入るものがなかったのが今はこの当たり前の日常に感謝することさえある。

あの殺伐とした世界からの解放は、現実の世界を今までとは全く違つ見方を出来る様へとプレイヤーたちを変えていた。

残念ながら、現実と仮想世界を同一視したかのような錯覚に陥つて社会復帰は困難とみなされて特殊な施設へと連れて行かれたプレイヤーもいると風の便りで聞く。

事実、そうなのだろう。レジィの世界で周りから危険人物とみなされていた目立ちたがり屋のプレイヤーは現実の世界では最初の頃こそ某掲示板で偉そうにしていたがある日突然と姿を消した。不自然な形で。

多分、現実に精神を戻しきれずに厚生施設へと連れられていったのだろうというのが仲間内で出した結論だった。

幸いといふか拓海がレジィの世界で仲が良かつたプレイヤーたちとはしっかりと連絡は取れている。万全とまではいかない者も居るようだが不自由するほどではない程度に日常生活には馴染み直せたらしい。

そして、拓海自身もその戻ってきた日常の日々を楽しく謳歌し、喜びをかみしめていた。

日常はいたるところにある

「コンクリートで出来た道、近代建築で作られた家、化学繊維で作られた服を着ている人々。

そんな当たり前の光景すら懐かしく思つていた時期があった。犬や猫などの動物を見かけるたびに思わずと臨戦態勢をとつてしまつうことすら現実に帰ってきた当初は体が自然と行つていた。

『レジスタンス・オンライン』では犬や猫のような見かけをしたモンスターもあり、最初の頃は倒すのに忍びないとか思つていたのに、逆に現実で見かけても倒そうとしてしまうなんてことも1年近くにわたる仮想世界の幽閉が引き起こした弊害だらう。

濁つた空気も心地よさこそ感じないものの体が懐かしいと感じている。残念なのは夜に綺麗な星空を見ることが出来ないとか。化学汚染とは無縁なVR世界の夜空は大概のプレイヤーにとっては大きな癒しとなつていた。

匂いにしても、道を歩いていれば出合う車からはまだされる排ガスの鼻につく匂いが現実だと教えてくれる。

見慣れた通学路が懐かしいものとなつて、最近ようやくまた見慣れたものとなつてきた。

そんな風に感じる感性が、より現実に戻つてきたということはつきりとさせそれが拓海にとつては嬉しくあり、硬いコンクリートで舗装された道を歩くことに現実を認識せられる。

そんなVR^{ヴァーチャル}とは違つた感触を足で感じながら拓海は自身の通り高校へと歩みを速めていった。

校門の前には拓海のよく見知つた顔があたりをきょんきょんと見

渡しておつ、拓海を見つけるとさわと瞬の端を吊つ上げて拓海へと声をかける。

「よお、後輩」

「おはようござります、先輩」

今は先輩となつた中学時代からの悪友の皮肉ともいえる後輩呼ばわりに對して仕返しどばかりに全く心を込めずに先輩呼ばわりをする。

「かかつ、しつかりと先輩を敬えよ？ 留年生君」

「好きで留年したわけじゃないですよ。先輩こそ落第生候補なんですから今度勉強を教えてあげましょうか？」

事実、この男 田町正樹たまちまさきよりも留年生である拓海の方が学校の勉強だけでいうならば上だつた。

拓海が勉強に秀でてこるといつよりは正樹が勉強を苦手とするといつことの方が遙かに大きな要因であったが。

「まあ、そん時やろじへお願ひするぜ」

拓海の皮肉を全く気にせずに教えを請おうとするあたりに正樹といつ男の図太さを垣間見る気がする。

「つと、いけねえいけねえ。拓海に聞きたいことがあるからこいつて朝からわざわざと待つてたんだつた」

「ああ、通りで先輩がこんなに朝早くから学校に来ているなんておかしいと思いましたよ」

「……なんか調子狂うから普段どおりに話してくれ」

「正樹が最初に後輩呼ばわりしたんじやないか」

「いや、このネタでからかわないで俺はいつ拓海をからかえばいい？」

「知るかよ…」

逆の立場なら間違いなく同じからかい方をしているであろう自分がことなど考えもせずに拓海は正樹に向って盛大にため息を吐く。

「で、何？聞きたい」とつて

投げやりな態度で正樹に向って話の続きを促す拓海だが、正樹は歯切れ悪くなかなかと話しださない。口を開くかと思えば思いとどまつて口をつむぐ。そんなことを何度も繰り返していた。

それだけで、拓海には正樹が言おうとしていることの検討がつく。普段から人が気にしていることをずけずけというデリカシーがないというか、歯に衣を着せない物言いをする悪友が俺に対して言い出しへくいことなど一つしか思い当たらぬ。

正直、その話題を口にするのは拓海としても嫌な訳だがそれでも長年連れ合ってきた悪友が、その事に対しても気にしているわけもなく分かるので拓海の口から切り出した。

「救出隊の噂の事か」

「…………う。ああ」

正樹は少しばかり肩を揺らして動揺を見せるが、すぐに拓海をしつかりと見据えて頷く。

「所詮は噂どまつた。事実、俺のところにはそんな話は来てないし、仲間からもそんな事実は確認できていない」

「でも、でもよ。お前が、お前らが実際に向えば……」

「正樹つ！――それ以上言つくなつ！――あの地獄を知らない奴が軽々し

くそんな事を口にするなんて許さねえ……

「…………つーーー」

拓海の怒号ともいえる声によつて言いかけた言葉を遮られる正樹はビクリと震える。周囲にいる登校途中の学生たちも何事かと一緒に注目する。

「…………すまねえ」

苦々しく、言葉を搾り出す正樹が口にできたのは短い謝罪の言葉だけだった。

「いや、俺の方こそむきになりすぎた。悪かった」

校門前の空間に沈黙によつて支配されるが、誰も動こうとしていない。拓海も、正樹も、周囲にいる学生たちも。

興味があるのだ、2人の話す内容に。未だに噂の域を出ていないが今、世間を賑わしているあのゲームに関するだけに。

救出隊 誰が言い始めたかのなどは全く持つてわからないが、『レジスタンス・オンライン・アゲイン(通称・RロアO A)』による最悪のゲームが再び幕開けた時から2週間ほどが経ったときにある噂がネットで流れ始めた。

世間の注目を独り占めしていると言つても過言ではないその事件に関わる噂だけにその噂はあつという間にネットを通して広がつていぐ。正式なニュースとして流れるなどしていながらも関わらず、今の日本には最早その噂を知らないほうが珍しいといつまでに広がっていた。

その噂こそが救出隊というRロアO Aの世界へと続いている、2つのタイトルの一次出荷用のデータを使い、クリアの可能性のある

るプレイヤーを送り出すということである。

普通に考えれば有り得ないその方法が妙に現実味を帯びて噂されるのにはROA^{ロア}の進捗状態にある。

前回の『レジスタンス・オンライン』の時と比べても被害者の数の多さ、圧倒的に遅い攻略ペース、死亡者の割合までもが前回よりも遥かに高い現状。

元々、ROA^{ロア}の世界が作られていた理由を鑑みればそれも当然のことであるのだが、ゲーム内での事情など、近しい人がVR空間へと囚われている現実に生きる人にとれば問題は別にある。

このままではクリアの前にプレイヤーの全滅、もしくは肉体の限界を迎えるという説すらも世間に広く流布しているのだ。

この現状を変えるためにゲームの外である現実から出来るのは新たなプレイヤーを送り込むことぐらいしかない。

現実で知りうる情報など攻略状態を知るための各地がプレイヤーによって解放されているか、魔王軍に制圧されているかということと、プレイヤーの現実での名とゲーム内でのレベルなど限られたものだけである。

そして、その情報から分かる限りでは幸福な未来図は描かれていらない。

だからこそ、クリアが可能なだけのプレイヤーを新たに送り込む、そんな噂が流れ始めたのだった。

そうなれば、最初に確保される人材は自然と拓海たちレジイで死線をかいくぐり、ハードモードとも言えるROA^{ロア}でも十分に通じうるだけの経験を手に入れているかつてのトッププレイヤーこそが第一候補へと挙げられる。

「正樹が気にする理由も良くわかる。だけど、だけどな。あの世界からの脱出どれだけ大変どれだけ死と隣り合わせかなんて実際に体験しないと分からないだろうが、2度と味わいたくないんだよ」

「……」

「確かに、行けば助けられる人がいるかも知れない。世論はそいつた風にもなるかも知れない。だけどな、それはお前らにも分かりやすく言えば内戦真っ只中の国に行って一つの国としてまとまるまで出てこれないってぐらいに危険なんだよ」

「……」

「ましてや噂が事実だとすれば俺らに求められることは攻略。後ろでビクビクと引きこもっていることすら許されずに己の意思で、少し間違えば全てが終わっちゃう場所へと行き続けなきやいけない。それこそ、今度は自分の自由のためではなく、言い方は悪いが完全に人のためだ。苦労して手に入れた自由が、危険から遠ざかれた生活が、必死でリハビリして元に戻った体が、その全てをまた投げ出せなんて言われる方の身にもなつてみる。ふざけるな、その一言でお終いさ」

「……」

ただ顔を下に向けて黙りこくる正樹。拓海自身言いすぎだとは分かつてはいる。が、周りの注目を受けている今だからこそ強く言わねばならない。

わかつてないのだから、あのVR世界の脅威を周りの連中は。だからこそ、強く言う。簡単に救える力があるならば救いに行つて欲しいと思っている周りの人たちに対しても

拓海　いや、元プレイヤーたちには救える力など無いのだ。あの世界では圧倒的なステータスと卓越したプレイヤースキルがあるとも少しの事で命を散らす羽目になる。

最強と呼ばれたプレイヤーはレジイでは沢山いる。実力の拮抗もあるが、最強の死により次に強いものが最強と呼ばれることなんて日常茶飯のこと。あるプレイヤーがレア武器を手に入れて最強と呼ばれるようになった次の日にはVR世界から姿を消していたことなんかもあった。

トッププレイヤーで居続けると言つのは同時に命の危険と常に隣

り合わせであることを意味しているような世界。普通ならば許される死を許されない状況で戦い、鍛え続ける心労は凄まじいものがある。

途中でその重圧に耐え切れずに脱落して、後ろのほうで「いやー」と暮らし始めたプレイヤーなど掃いて捨てるほどいる。

拓海自身も自分でよく最後まで最前線にいたな、と思い返すことも多いし、それを夜中に夢見てうなされ、飛び起き、眠れなくなるとこうコンボを何度も無く体験していた。

「すまん、言い過ぎた。最近周りから期待するかのような視線を浴びることが多いと疲れてるんだ」

「……、いや、わけ無神経だった」

誰も何も話さずに、視線を拓海に向けることも出来ず、それでも去ることも出来ないそんな空気を変える為に拓海が口を開く。
普段は見せないような落ち込みようを見せる正樹は親友とも言える相手に無神経なことを言ってしまった事を気にしているのか、それともROAに囚われてしまっている自身の妹の救出に対する可能性が低いままのことが原因だろうか。

おそらくは、その両方だね。

「ひらー貴方たち校門の前で何してるの?ー?もうじき始業の時間よ

そんな怒声になつてない怒声をあげないぜ!ちらにせつてくるのは拓海の担任でもある神原理子女史さかきほりこしである。まだ教員3年目の新米では威厳をかもし出すことは難しい。

校舎に備え付けられた巨大な時計を見てみれば、急がなければ朝のHRが始まってしまう時間であり、それを確認すると同時に校門前にたむろした格好となっていた生徒たちが一斉にと校内へと駆け

出す。

拓海と正樹のせいできれだけの生徒が立ち往生していたのに驚きつつも、拓海と正樹も遅れてはまといと駆け出すが理子先生によつて呼び止められる。

「あつー待つて、佐久間君にはお話があるので教室ではなく、校長室に行って下さい」

「へ？」

拓海から漏れ出たのは間抜けな声。それも仕方がないだろう。今から呼ばれるということはもちろんHRにはでれない。すぐに済めばよいが、校長室にまで呼び出された内容がすぐに終わると考えるほど拓海は楽観的でもない。

おそらく、1時限目は潰れること確定である。

実際のところ、留年生である拓海が呼び出しを受けるのを珍しくない。されども、放課後に進路指導室と相場は決まっていた。

授業中には校長室でなんてことは今まで1回たりとも無かつたのだ。

「あの…HRが…」

「HRは出なくて大丈夫です。授業も間に合わなかつたとしてもちゃんと出席扱いになります」

拓海の機先を制すように言ひ理子先生の言葉の端からはさつれと校長室に行けといつ二コアンスがたつぱりと呟まれている。

「…………わかりました」

拓海は生徒であり、先生である理子には学校といつ場では敵わない。ましてや、その上にいる校長からの「」指名であることには疑いないのならば拓海には最初から選択肢など一つしかなかったのであつ

た。

軋み始める日常

校長室を前にして1人の少年が仁王立ちを続けていたが、それは傍から見れば異様な光景だらう。

少年 佐久間拓海さくま たくみにとってもそれは望んだ自体ではない。言つてしまえば、校長室に呼び出されるといつ事態自体に望んだことではない。

それでも校長から呼び出されたのであれば応じるほか無く、されどそんなあからさまに不可解な呼び出しを何の心構えも無く聞けるほどに拓海の心は強くは無い。

留年ることは担任である理子先生と散々に話し合つて一応の結論は出ているし、校長室に呼び出されるような不祥事を働いた記憶も拓海には無かつた。

校長室の前についてすでに3分が経過しようとしていたがその間ずっと拓海は校長に呼び出される理由を考え続けているが皆田と見当がつかないでいる。

そして、この3分は同時に拓海が考えてもしかないと割り切つて校長室のドアをノックするまでにかかった時間でもあった。

コンコン、と小気味良い音が目の前の扉から発せられると同時に中から校長の声が返つてくる。

「誰かね？」

「佐久間拓海です。榎原先生に校長室に行くよつて言わされて来ました」

「入りなさい」

「失礼します」

扉を開けるとすぐにお辞儀をして、3秒ほど経つた後に頭を上げると校長室には校長先生のほかに2人の男がいた。

校長用の机に座つておらず机の前の接客用と思われるテーブルを挟んでソファーに腰掛けている様子を見ると来客中であることには疑いない。

拓海は現状を把握すると直ぐに再び頭を下げる。

「すいませんでした。来客中とはしらずに」
「用があるのは私ではない。城井さんと中川さん、今私の前にいるお一方が用があるそうだ」
「…………はあ？」

校長にそう言われて城井さんと中川さんと呼ばれた人の顔をまじまじとみる拓海だが、2人の顔に見覚えはない。

「久しぶりだね。佐久間君」

しかし、2人の男のうちの片方は拓海を知っているようだった。

「忘れちゃったかな？ほら、佐久間君があの事件から帰ってきたときに色々と話を聞いたんだけどな」
「…………ああ！？」

少しの逡巡の後に田の前の男のうちメガネをかけた方の男が拓海が現実へと戻ってきたときに色々と事情を聞いてきた同じ省庁に勤めている男だということを思い出す。

記憶が結びつけばそれだけ掘り出しやすくもなつてくる。確かあの時の男の名は中川という男だった。

「その節はどうもお世話になりました」
「いやいや、それが僕らの仕事だからね。佐久間君も元気そうで良かったよ」

思い出すと同時に頭を下げる拓海に対して中川という男は気にせず振りを見せない。

「ここに座りなさい」

この部屋の主である校長がそう言いながら拓海に示した席は来客の2人と向かい合う席 校長の隣だった。

校長と1つのテーブルで向き合つのも相当に嫌と言つか疲れるが、拓海としては校長と同じソファーに腰掛けるほうが余程疲れる。いつそのこと立っていた方が気分的には楽ですらあるが、それでも座りなさいと言われては学校の最高権力者に逆らつてこいつなど到底できない。

「は、はい」

緊張のせいで返事がたどたどしくなり、ソファーへと座る動作もぎこちない。

それでも座ったソファーは校長室あるだけに相応のものらしく、家にあるソファーとは全く違った感触が拓海へと訪れる。

「初めてまして、佐久間君。私は城井と申します。国の機関まあ、教育関係のところに勤めている者だよ」

拓海が着席を終えるタイミングを待っていたのか長身の男が名乗りを上げる。

「は、はい。よろしくお願ひします」

自身の名前を知っているのなら自己紹介は不要だつと拓海は考

え、挨拶だけを返す。

しかし、拓海にとつては校長室にあの事件の拓海の担当にだつた男と教育関係に勤めている男が揃つて拓海を呼び出すなんて嫌な予感以外のものなど感じられようはずもない。

「あまりいい話ではないのだろうけど、ここに来た用件はね」

前置きは無用とばかりに城井は話し始める。

拓海にとつてはもう少し心構えの時間が欲しいところではあるが、本題を切り出さずに焦らされ続けるのも腹に優しくない。ならば、いつそ一息に話を終わらせる普段の学校生活へと戻れるのならばそれもいいかと考えて話を遮らない。

「佐久間君に転校を勧めに来たんだ」

「えっ、転校…？」

城井が言い出したことは拓海にとつて思いがけないものであった。

拓海にとつては苦労の末に取り戻した峰ヶ_{みねがふじ}藤第三高校で生活。最近になつてようやくかつての後輩とも円滑なコミュニケーションが取れ始めるようになつた拓海にとつて学校生活は楽しいものだった。だからこそ、城井から放たれた一言は拓海が苦労を水泡に帰すかのような事で言葉で伝えられても頭が理解してくれるのに時間がかかる。

「先に言つておくと、この件は強制ではない。佐久間君の自由意志

だ。しかし、転校を希望した場合は学校のほうはこちらで用意した全寮制の学校となる。そして、私たちとしては出来れば転校を選んで欲しいと思つている』

拓海が言われたことを頭が認識してくれる前に足早に話を続ける城井。

「で、転校を勧める理由だが……」

「え、あの、ちょっと待つて……」

「ん？ ああ、そうだね。急にこんなことを言われても困るか。落ち着いたら声をかけてくれ」

拓海が話を遮ろうとする声を聞くと今度は黙りこくつてしまつ城井。

拓海が言われたことをしつかりと理解して、頭の中の混乱を收めるには確かに静かな環境の方が望ましいだろう。

しかし、しかし、だ。校長室という場所で3人の大人が拓海に意識を注目させ続けながらも校長室にあるのは静寂だけといつ状況に耐え切れるような成熟した精神を持つ高校生など稀だらう。

そして、拓海はその稀に属するような精神を持つた男ではなかつた。

「…… 続けて下せ」

結果、拓海の口から弾き出される言葉は限られてしまつていた。

「では、話を続けましょうか。実は最近は佐久間君のような『レジスタンス・オンライン』の被害者と周りの人間との間で軋轢いや、正直に言つてしまえば衝突すらも起つてこる」

それは拓海といわずに被害者たちにとつてはある程度予想の出来たことだった。仮想世界での1年近い幽閉によつて現実とは全く違う価値観を求められる生活が続けられれば現実に戻つたとしてもどうしても歪みがでてしまつ。

そういう事例は現実に戻つてすぐに大概の被害者たちは経験をしているし、政府としても予想できた事態でもあるためにリハビリには衰えた筋力の回復だけではなく、精神科医との対話も盛り込まれていた。

そして、拓海のように再び社会に戻れているものは完璧とまではいかないが日常生活に支障をきたさず、リハビリーションも大きな問題は無いと診断された者たちである。

体は問題ないのに精神の問題で未だに社会復帰できていない被害者というのもおり、専用の施設でリハビリの日々をすごしていると拓海は聞いていた。

拓海自身、学校生活に戻つて他の生徒たちとの間で微妙な齟齬がうまれてしまふことは珍しくなくはないが、それでも修正の効く範囲のことであるし多少会話が上手く繋がらないとか空気が読めない呼ばわりされる程度の被害しか出ていない。

まあ、そういう被害は地味に精神的ダメージが大きいのだが。そういうた意識の微妙な違いも段々と減つていることは確かで、拓海自身最近は空気が読めない呼ばわりされることが減つてきてるので心の中で自身の進歩を褒めていたりする。

だからこそ、この状況での城井の提案が理解できないし、納得できない。元々、被害者の学生たちは復学するか、被害者専用の学校に転学するかを最初に提示され自身の意思によつて選んだ。

被害者専用の学校は古びた学校を改装されたもので、転学を決めた生徒たちはこの学校へと通うこととなる。今のところその為の場所は1つしかなく、世間との摩擦を懸念してか寮での暮らしが義務付けられていた。

もちろん、復学の為の条件の方が厳しく中には復学を希望しつつ

も転学という選択肢で妥協した被害者もいた。

拓海自身も苦労して貰えた復学許可の末に戻ってきた、意識のずれや後輩との同級生という現実を前に転学を選んでおかなければよかつたと当初は思つていたりもした。

実際、復学しながらも直ぐに転学したといつ被害者もいるようだ。だからこそ、そんな努力に努力を重ねた挙句に手に入れた今の場所を手放せとも取れる城井の言葉を素直に受け取れずにはいる。

「では、続けましょう。誤解のないよう言つておきますが、佐久間君自身がこの峰ヶ藤第三高校での生活が不適切と思われたわけではありません。むしろ、他の復学を選んだ学生たちの大半が馴染め切れていない中でのこの適応力は見事としか言えません」

「……」

言葉にはしないが「だったら、なんで」という意思を瞳に宿して城井に対して若干ではあるが視線を拓海は強める。

そんな拓海の視線を気にした風も無く城井は自身の目の前に置かれているお茶を口へと運ぶ。

「ふう、失礼。私も少し緊張しているようです。佐久間君ものぞが渴いたらお好きに飲んで下さい」

城井に言われることで拓海も自身の渴きを認識する。校長室に入る前から緊張し通しあつたことを考えるならば無理も無いことだ。拓海の座る前には最初からお茶が用意されているがすでに湯気がでていないところを見るこの入れられてしばらく経つているのだ。

一口、口に入れるが温いお茶は飲みやすく、のどの渴きもあって拓海は一飲みで飲みきってしまう。

「ふむ、お茶はもつ少しあつた方がいいようだな」

そんな事を口走りながら拓海の隣に座っていた校長が立ち上がり、別の机の上に用意されていた急須とポットの前へと動いた。

「コーヒーの方がよろしいですか？」

校長は急須に茶葉をいれようとして、思いついたように振り返って訊ねてくる。

「いえいえ、お茶で大丈夫ですよ」

「僕もコーヒーは苦手なもので」

「ふむ、そうですか。佐久間君は？」

「…え」

思わず拓海の口からうめき声が漏れるが、それも仕方ないことだといえる。校長がこういった場面で生徒である拓海の意見を聞くとは思つてもいなかつたからだ。

逆に言えば、この場でコーヒーがいいと言えば、校長はコーヒーを用意してくれるだろ？。拓海が校長をコーヒーを入れさせたという事実を残して。

そんな事実を残すのは拓海としてはただでさえ、目立っているのにこれ以上に悪目立ちする要因へとなりかねない。

「僕もお茶で大丈夫です」

だから拓海はお茶よりコーヒーが好きなことを隠して、普段は使わない僕なんて一人称を使ってまで校長へと伝えたのだった。

口常に多くは求めない

校長先生が空になつていてる各自の湯飲みへと急須からお茶を注いでゆく姿は生徒である拓海には申し訳なさに包まれる。僅かながら校長よりも立場が上のような優越感も全く無かつたわけではないのだが。

最後に自分の湯飲みにもお茶を注いだ後にテーブルの端に急須を置くとゆっくりと校長はソファーハと座り直した。

「では、続きとこきましようか」

城井のその一言で拓海、校長の視線は城井へと向けられる。

「さて、転学を勧める理由としての前提なんですが、佐久間君は救出隊なる噂話を知っているでしょうか？」

拓海は大きく頷く。

「まあ、そうですね。もう知らない人を捜すのが難しいくらいですしね」

城井としては一応の確認程度のつもりだったのだろうが、拓海の心中としてはとても穏やかではいられない。

その噂話のせいでの拓海は最近はやや慳貪な視線を浴びることが多くなっている。

「…………事実ということなんですか？」

政府の役人である城井の口からその手の噂話が話されるところ

とはその可能性は高いと拓海は考える。

「それは僕のほうから答えよ！」

今まで黙つて城井の話に口を挟まなかつた中川なかがわが言つ。

「救出隊なんて考え方は解決策なんてとても呼べたものじゃない。ましてや、一部の危険が付きまとう職業に就いてる人とも違つて救出隊の要となるのはそんな覚悟をしている人たちじゃない訳だ。現状で解決策というのはでていない。前の事件のときと同じようにね」

そこで、少し口くちが止まる中川だったがもじもじと数回繰り返した後に再び話しあした。

「そして、外から救出、いや干渉事態が困難な中で、VR世界での状況もまた看過できない状態へと推移しつつある。外れて欲しい予測だが、加速度的に死者は増えることになる。そうなれば、世論はますます救出隊の結成を望む声が高まっていくだろう。正直に言つてしまえば、すでに志願者がいれば受け入れるというのは決まつている」

「看過できない状態？」

拓海に取つては志願者の受け入れよりもそちらの方が気になる。現状ではVR世界へと戻る気などさらさら無いのだから。

「一応、オフレコオフリコ」になつていいんだね。話せない……と、言いたいところだけど明日には発表されるだろうし、今日来たことにも関係があることなんで話しても構わないと言われている」

そう言つて、中川は校長へちらりと視線を送る。

「私は席を外していたほうがよいかね？」

「…………いえ、前もって知っていた方が良いかも知れません」

「ふむ、では聞かせてもらつても構わないのだな」

「ええ」

そこで大きくため息をついた後に中川は拓海の方を向いた。

「拠点の内の一つが制圧されました」

感情を全く込めずに言い放つ。

「つづつ……？」

拓海は声にならない叫びをあげる。それだけ中川がもたらした情報は衝撃的だった。

拠点　『レジスタンス・オンライン』の中では浸透している言葉でこれはプレイヤーが『レジスタンス・オンライン』を始めた時にランダムで決められるプレイヤーの初期所属となる6つの都市の総称である。

魔王軍に支配されたフィールドを解放していくレジスタンスでは、プレイヤー側からの進軍だけではなく、魔王軍側からの侵略行為もある。そして、侵略に耐え切れなかつた町や、フィールドは魔王軍が支配することになる。

プレイヤーによって解放されている街中は安全地帯となつており、死亡することは無い。が、魔王軍に支配されているのは例え町でもフィールド扱いとなつており死亡するし、平気でモンスターがうろついている。

中川の言つことが事実ならばそれは、全プレイヤーの6分の1が四六時中モンスターの脅威にさらされ続けるということを意味していた。

「佐久間君、落ち着いて。まだ大丈夫だ。周りの町のいくつかがプレイヤーによつてすでに解放済みだ」

「馬鹿ばっかりじやねえか！！」

周りが田上の人ばかりといつことを忘れて拓海は罵声を上げてしまつ。

拠点は落ちているといつのに周りの町が開放されているといつことは守ることなど考えずにひたすらに攻略を続けているということだ。

それでは、このゲームをクリアすることを無理だといつことを拓海は知つてゐる。だからこそ、声をあげてしまった。

戦闘系の職業に就いていいるプレイヤーはいい。だが、生産系の職業に就いていいるプレイヤーは戦闘ができるとまでは言わないが戦闘では大きいディスアドバンテージを負うことになる。

有体に言えば、死のリスクが戦闘系の職業とは比べようも無いほどに高い。

そして、拓海は『レジスタンス・オンライン』における生産職の重要性を嫌というほどに理解している。おそらく、生産職を無視した攻略を続けていれば今なおVR世界に囚われていただろう。

「今まで最高の死者を記録したけど、それでもまだ少ない方だ。予測値よりは圧倒的に少なかつたのがせめてもの救いだよ」

沈痛な表情で話し続ける中川。能面のような顔をして感情を出そうとしていない城井。事の重大さにやや顔を青くさせる校長。そして、経験者としてその思考に感情が昂る拓海。

「だが、多数の死者が出てしまったことは事実で、隠しようがない。情報は公開するしかないんだ」

「……」

「そして、この事態は世論をより一刻も早い解決への声を大きくするだろう。そして、現状解決策はでていない。せめてもの可能性が救出隊だけ」

皆が皆黙つて中川の話に耳を傾け続けている。そこには痛々しい空気が充満していた。

「事態はより最悪なことに後追いという行為のおかげで追加での参加ができるることを証明してしまっているしね」

後追い 救出隊の噂が流れ始めた頃から行われるようになつたその行為は、家族や恋人、親友といった自身にとって大切な人が『レジスタンス・オンライン・アゲイン』に幽閉されてしまつている事態をどうにかしようと後を追つて仮想世界へ入つてしまつことから名付けられた。

政府としては事件の発生の直後からゲームディスクの回収をしているが、それでも全てを回収とまではいかなかつた。それが裏で流れ始め、後追いという社会現象を起こしてしまつてゐる。

「だから、峰ヶ^{ヒラカ}藤第三高校は佐久間君にとつて間違いなく辛いものなる」

「そこで、最初に私が話した転学の話になる訳です」

重い空気を振り払うかのように自然と城井が話を引き継ぐ。

「現時点でも、相当な数の衝突が確認されていますし、過剰なプレ

ツシャーによるノイローゼを引き起こしている方もおります。佐久間君の周りではまだ運良く死亡者が出ておりませんからそこまでの風当たりを受けていないにすぎません。これから1人、2人と死亡者が出るたびに佐久間君に対するなんで助けに行かなかつたんだという非難がましい視線、言葉。最悪の場合は刃物沙汰の危険もあります

「なんで…なんでっ！？」

思わず叫んでしまう拓海の心内は理不尽だと訴えていた。
あの地獄を知らないような奴らになんて助けに行かなかつたんだと責められなければならないと。

「佐久間君の気持ちはわかります。ですが、周りの人の中には佐久間君が助けられる力を持ちながら助けようとしたそういう風に考える人間が出てこないとは言い切れません。いえ、確實に出てくるでしょう。特に大切な方を失つた人は」「すでに襲われた生還者も出ている」

付け足すような中川の言葉が拓海の頭の中で何度も何度も反響する。納得できない、したくない類の話なのに。

「そして、佐久間君の方はより事態が悪いといつて言い。生還者の中でも安全地帯で震えていただけならまだいい。戦う力がないことを分かつてもらえるから。中堅ぐらいのプレイヤーなら期待ぐらいされるだろうがまだ過剰な期待されないだろ？」

そこまで中川が言えば、聞かなくとも続きは分かる。

「世論が期待するのは『レジスタンス・オンライン』の攻略を成し遂げた者たちだ。彼らなら再びこの最悪のゲームを終わらせてくれ

ると信じて、ね。そして、「

「……聞きたくない」

拓海がうめくよつにぼそりと漏らしたその一言に中川は気付かず
に話し続ける。

「望むんだ彼らが悪夢を終わらすために再び……」

そこまで中川が言つた時、拓海の感情が爆発する。

「聞きたくないっ！聞きたくないっ！聞きたくないっ！聞きたくな
いっ！聞きたくないっ！聞きたくないっ！聞きたくないっ！聞きた
くないっ！聞きたくないっ！聞きたくないっ！」

壊れたかのように同じ言葉を繰り返し続ける拓海。

「落ち着いて、佐久間君。僕たちは望んじやしない。あくまでも世
論がそういう風になるだろから心構えをしておいて欲しいという

……」

宥めるような声色で拓海を落ち着かそうとする中川だとそれは拓
海には届かなかつた。

「わかるかっ！あんたたちにっ！あの地獄の中でっ！死ぬかも知れ
ないっていう恐怖の中でのっ！それでも現実につ！戻る為につ！死ぬ
かもしれない恐怖と戦いながらっ！毎日つ！毎日つ！それでもつ！
戦つてつ！戻る為につ！俺はつ！俺たちはつ！恐怖を抑えてつ！恐
怖を騙してつ！恐怖を殺してつ！」

一句一句、はつきりと聞かすように区切りながら大声を上げ続け

る拓海。それは金切り声にしか最早聞こえていない。

「やつと、やつとつ！ 戻つてきたりつ！ 今度はリハビリでつ！ 手に入れた現実がつ！ 遠のいたつ！ あの気持ちをつ！ 知らずにつ！ 終わつたらつ！ 待つてたのはつ！ 辛いリハビリでつ！ 何度も、何度もつ！ まともに歩けずに転んでつ！ その度に痛い思いしてつ！ それでも、それでもつ！ 峰ヶ藤第三高校に戻る為に頑張つてつ… やつと、やつと戻つてきてつ！」

校長室を支配するのは拓海の泣き叫ぶかのよつとも聞こえた声。それは酷く耳障りだらうが、中川も、城井も、校長も、それを止めよつとはしないし、咎めよつともしない。

めに迷ひなつて、娘の心をもつた。

「そしたらっ！ 今度はっ！ また戻れってっ！ ？ ふざんけんじやねえよーーーあの世界を知らないいくせにつ！ 何ほざいてんだよー！ んなもん人に押し付けんじやねえよー！ 期待すんじやねえよー！ 何も知らないいくせによおらないいくせにつ！ 何も知らないいくせにつ！ 何も知らないいくせによお

喚き続ける拓海の声量は衰えることをせずにますます高く、大きくなっていく。

「もうやだよつーもうやなんだよつーやつと戻つたんだよつ！平和
に、日常に！壊すなよつー壊さないでくれよつー頼むからつー^ト
本当に、頼むからつー！」

すでに拓海に顔の顔はぐちゃぐちゃになり、目から涙が流れ続けている。声も枯れ始めている。

しかし、それでも拓海は口は言葉を、思いを吐き出し続けたのだった。

守りたい日常

「落ち着いたかね、佐久間君」
さくま

錯乱ともとれる叫びを続けた拓海は疲れてソファーへと寄りかかっており、その前に空になつた湯飲みが置いてあつた。

叫び終わつた後に拓海は一気に温くなつたお茶を飲み、それに急須の中で温くなつたお茶を校長が注ぐという行為を数回終えてから拓海は要約と落ち着きを取り戻したようだつた。

「…………すいません」

「いや、こっちこそもう少しオブラーートに包んで言つべきだつた」

中川はぐつたりとした様子の拓海を心配そうな顔しながら答える。
なかがわ

「…………だが、今さつき言つたことは現実になる可能性が高い。それだけは覚えておいて欲しい」

「…………っはい」

疲れもあるだろうが、いい加減に理解もし始めたのか拓海も今度は大人しい。

「話を続けさせてもらつが佐久間君、大丈夫か？」
「はい、大丈夫です」

城井も拓海の様子を気にしつつも話に戻らうとする。
しろい

「では、続けさせてもらつ。さつき、中川君が言つたような事態は我々のほうでも危惧してつてね。これから的生活を考えれば転学を

強く勧める

「多分、佐久間君も覚えがあるだろ。周りの人たちから妙に注目を集めている」

確かに今までも注目を受けていることは拓海にも分かつてた。そして今日、正面から正樹に言われそうになつたから機先を制して最後まで言わせなかつた。

拓海自身が行く気がないという意思をしつかりと示したし、周りの人たちもこれで軽々しくその話題は振つてこないだろ、と考えていたのだ。

だが、中川と城井の話を聞く限りでは間違いなく行かないという意思表示しただけでは諦めないような人たちがいる、ということだ。実際に峰ヶ藤第三高校からは被害者は出ているが、死亡者はでていな。それは、恵まれてることであり、そういう環境が拓海に対する風当たりを抑えているというのは事実なのだろう。

「佐久間君。君がレジスタンスの世界で攻略に関わっていたことを誰かに話したかい？」

中川の問いかけにふるふると力なく、拓海は首を横に振る。

拓海にとってあの生活は精神を削り続ける生活であり、思い出しあくも無いことだった。だからこそ、拓海にとって攻略という最前线にいた事など忌まわしい記憶でしかなかつた。

話すということは思い出すということでもある。武勇伝として話せる程に拓海の中での生活は過去になつていな。

「よかつた。もし、話していたら大変なことになつていたかも知れない」

「…………大変な事？」

「ああ、実は周りに自慢していて、それが原因で連日、家の前まで

被害者の家族が『助けて下さい、助けて下さい』って押しかけるつていうことも起こっているんだ」

中川の話す内容に拓海は背中をぶるりと震わせる。内心ではホラ一映画よりも怖いと思つ。

「まあ、とにかく。話さないほうがいいのは確かなことだね」

拓海は疲れているにも関わらず、ぶんぶんと何度も大きく首を縦に振る。それだけ、そんな状態になってしまったのは望んでいない。

「さて、それじゃようやくと最初の話に戻れるね。以上の理由から転学を……」

「これから城井さんによる親切かつ分かりやすい転学についての説明とそれに関わる色々な調整、そして転学先の学校についてのあれこれの長い説明が始まつたのだが、疲れきつた拓海の頭には入らず『資料を渡しておから親御さんともよく相談して決めて下さい』の一言で締められた。

その後は校長の『今日は疲れただろうからもう帰りなさい』との言を頂き、拓海は結局、授業はあらかクラスに入ることすらなく、今日といつ日の学校生活を終えたのだった。

「ただいま…」

疲れきつた挨拶とともに拓海は我が家へと入る。

「あら、今日は早かつたのね」

そんな拓海を母親の夕実が向かえる。最近は終日、授業を受けている拓海だが復学当初は途中で切り上げて戻つてくることは多かつた。

これは拓海だけではなく他の生還者たちにもいえることで、本人たちがまだ大丈夫だと言つても強制的に帰される事もあった。それだけ生活の変化の幅は大きく精神への負担を強いていふのと、全盛期に比べて衰えた体力を気遣つてのこともある。

従つて、息子がこのような昼前に帰つてきたとしても責めたりすることなど有り得ず、温和な笑みさえ浮かべる。

そんな母親に対しても少し気難しそうな顔をした後に拓海は学校であつたことを告げる。

「…転学を勧められた」

「やつぱり、普通の高校は少し辛かった？」

夕実は拓海の体力の衰えと1年余りの精神に余裕がなかつた生活での変化で、拓海が元通りの学校生活を送れるかを心配していた。だからこそ、拓海の言う意味との微妙な齟齬がある。

「ちょっと、違うんだけどね。父さんが帰つてきてから詳しく話すよ」

今ここで話しても宗平が帰つてきてからまた話すことになるのは確かで拓海にとつてはあまり話したくない内容なのもあって、夕実に詳しい事を話さないままに拓海は自室へと引っ込んだ。

自室へと入るとまずパソコンの電源を入れることから拓海は始める。

聞きなれた機動音は昔に比べて大きくなっているのが不安を誘い、買い換えようかなと考えることも多いが、愛着がついてるのか踏ん切りがつかないでいた。決して、拓海が望むパソコンスペックのせいで値が張り踏ん切りがつかないわけではない。

拓海は起動し終わつたパソコンからすぐにインターネットを伝いあるサイトへと入ることから始める。

そのサイトは政府が用意した『レジスタンス・オンライン』の被害者たち用に作られたものであった。

特殊な環境で生活せざるを得なかつた被害者たちはそれぞれに現実に対する現在の悩みも似通つたもの多く、その中には同じ被害者で無いと理解しあえないものも多い。

そういう意味で被害者たちの情報交換の場として、このサイトは十分に機能しているといえた。

このサイトに入る為にはパスワードが必要であり、それを知つているのは被害者を除くと限られたものしかいない。

被害者に対する偏見などの世間の目もあり、被害者の愚痴のぶつけ合いなど憩いの場にもなつている。

中には、全てを忘れないと全く顔を見せない元プレイヤーもいるが、それでも生還者の実に8割近くが日常的にこのサイトへと訪れていた。

しかし、拓海はそういうたスレには滅多に顔を出さない。ROM専という訳でもない。

拓海が使うのはもっぱらチャットルームである。レジスタンスで出会つて、仲良くなり、一緒に死線をくぐつてきた仲間との会話の場としての意味のほうが拓海には大きい。

「うわ……」

それでも、今日はチャットルームへと駆けつくることをせずに板の1つへと入る。そこにパッと表示されているスレのほとんどのタイトルは周りの人との軋轢のことばかりだった。

1つ、2つ、3つとスレを開いていく中でため息混じりに声が漏れた。

「俺んとこってほんとにまだマシなほうだつたんだな」

眉に皺が寄せられており、今までの環境が恵まれていたということを拓海は自覚せざるを得なかった。

周りの人から受けた過剰なプレッシャーは多かれ少なかれの違いこそあれど実際に様々な実体験がつづられている。それは、拓海にとっても明日の我が身となりそうな話もある。

「気がめいるな」

拓海は今の中高を気に入っている。特に偏差値が高いとか、部活動を入れているとかそういうことではなく、非日常に身を置いた拓海に取っては何かに力を入れずにのびのびやれるという点が気に入っていた。

トッププレイヤーでいた拓海はレジスタンス内でも他のプレイヤーたちからもクリアを期待されるような生活を送っていたので、尚更だ。

仮想世界での長い幽閉期間と留年でもつて学校内での関係は前とは全く違つたものとなってしまったが、それでも正樹まさきを始め拓海を気にかけてくれる友人というのは多い。

それが原因で疎遠となってしまった人もいることが、それがきっ

かけとなり前と変わらない扱いをしてくれる友人といつものの大切さを拓海に伝えてきた。

おそらくだが、昔と今の両方で仲良くしている学友たちは高校を卒業した後も連絡を取り合い続けるだろうと拓海は思っていた。だからこそ、余計に転学という選択肢がここで降つて湧いてきたのが拓海には辛い。

急に言われても納得するのが感情的には無理だった。理屈だけならば納得できないこともない。

更に言うならば日が悪かった。ちょづび、正樹と校門前で言い争いをした日に、限って。

普段ならば、一笑に付すとまでは言わないが、それでもどことなく他の世界の話のような気がしていただろう。

だからこそ、より一層と納得する理性と納得しない感情が拓海の中で揺れぎ合つ。

苦労して手に入れた場所は再びと望まない世界へと変わろうとしている。そんな世界へとなろうとした時に守ってくれるのが家族であり、友達である。

しかし、学内で最も拓海が信頼を寄せる正樹は新たなる被害者の身内という重い、重い事情を抱えている。

そして、今日の言動を見る限りは正樹にとっては拓海よりも妹の方が優先順位が高い。それは、いざという時に限らず正樹もまた拓海へと助けをすがる1人になる可能性が高いということになる。

家族は守ってくれるだろう、拓海を。しかし、それは一步でも外を出れば拓海は家族という守り手を失う無力な高校生にしかならない。

家から出ない引きこもりになれば話は変わるかも知れないが、それは拓海の仮想世界での精神の磨耗と現実での辛いリハビリ生活といつ2つのを乗り越えてきた努力の全てを無に帰す選択肢だ。

だから、感情的には苦労の末に手に入れたこの場所にいたい。そんな思いが現実を受け入れずらくする。

だが、掲示板から得られる情報はそんな拓海の気持ちなど露知らずばかりだった。

拓海の周りでは起きるのが遅かったというだけ。今日の校門前でのやり取りを見ればそう簡単には話題が救出隊にならない、と拓海は思っていた。

その予想は間違つてはいない。現状が続くならば誰も無理強いまではしないだろう。

掲示板に書き込まれることも同じ被害者の悩み程度で方をつけていただろう。今日の朝までは。

すでに拓海は知っているのだ。現状が変わることを。望まぬ方向へと。

城井と言うとおり、それが発表されたときには周囲も変わらずはいられないだろう。前はクリアできたんだから今回も大丈夫だろうと楽観的に考えていた者たちが手のひらを返すように。

拓海の周りでの前回での被害者は拓海だけ。けれども今回は違う。死亡者という結果がでていない今だからこそ現状。

それが変わるきっかけはもう起こっており、もう変わることは無い。

それがきっかけとなり、変わらなかつた友人は、変わっていく。いや、もう変わり始めている。

日常の変革を望まない少年は想像もしないだろう。日常が続いていれば望まぬ明日と同じような日がいざれきていたと。

口常にすがる心

夕食が終わつた後に佐久間家では家族会議が行われていた。

内容は拓海の転学についてであり、親である宗平、夕実だけではなくその場には兄の文也の姿もあった。

大学生である文也は遅く帰つてくる」とも珍しくなく、夕食の時間に帰つてくるほうが珍しいといえる。

偶然なのだろうが、1人でも意見を提供してくれる人が多いのは拓海にとつても歓迎すべきことなので兄の気まぐれに感謝していた。家族は拓海が今日のことを話している間は神妙に黙つていたが、拓海が話し終えると同時に意見を求めるとき宗平が少し躊躇いがちに口にしたのだった。

「……転学したほうがいいのかも知れん」
「どうして？」

拓海としては未練がある。今の生活に、だ。だからどうか素直に疑問が口に出る。

「すがれる対象が近くにある、ということは危険だ」
「そんなに……？」

宗平がいうすがれる対象とは拓海のことになる。そして、拓海の現状をよく表した表現ともいえた。

自分にとつて大切な存在が命の危機だというのに何も出来ない無力感、出来たとしても力になれる可能性は高くない。

そんな歯がゆさの中ですぐ近くにその状況をどうにかできる者があつたとしたらどうするだろうか。
すがるしかない。大切な人を守るために。

最初は純粋に助けてくれといつお願いだらう。だが、お願いとうレベルでは済まない。

自身にとつて大切な存在がいなくなる可能性があるのだから、それは断られたから『はい、そうですか』とお願いする方も引けない。お願いされる方としても代価として己の命が危険にさらされるとわかつているのに『わかりました』と答えられない。

断られたからといって諦める訳にはいかない状況の中で圧倒的に不利なのは間違いなくお願いされる方、元プレイヤーたちである。数が違うのだ。1人の被害者がいたとしてもその救出を強く願うものは1人ではない。家族、友人といった関係の者たちはその気持ちの強さに違いこそあれど被害者の無事の帰還を願っているものであり、すがる者となる。

特に親や恋人、親友などといったものは強くすがる。たとえ、みつともないとわかつっていてもそんなプライドをかなぐり捨ててまでも構わないと思えるほどの強い絆を持つものはいるものだ。

諦めさせようと無茶な要求を突きつけてもそれを飲んでしまうほどに。

「私も拓海が囚われている時に、もしすがれる対象があるのならばすがつていた」

「きっと私も、ね」

「まあ、俺もそうだろうな」

家族皆がそう言つてくれるのは大切にされているとわかり拓海にとつては嬉しいことだが、今の状況を考えると喜びきれない。

少なくとも被害者の家族は連れ立つて拓海にすがつてくる可能性は限りなく近いといつことになるのだから。

「あの時は何もできなままだった。ただただ、帰つてくるのを待つことしか」

哀愁が漂う雰囲気を醸し出しながら宗平は少し遠い目をしている。

「辛かつたわ。寝てる間にうなされて起きるなんて事はショッちゅうだつたし、携帯に警察から電話がかかってくる度に拓海に何かあつたのかって電話に出るのが怖かつた」

そう語る夕実の顔色は青いのは当時の鮮明な記憶を思い出しているからだろう。

「俺は母さんほどほひどくは無かつたけど。それでもやっぽし夜中に飛び起きたのは何回かあつた」

「拓海が現実に戻つてくるために向こうで頑張つているのは知つていた。だがな、親から言わせて貰えばそんなことはして欲しくなかつた。後ろの安全なところでゲームが終わるまで待つていて欲しかつた」

宗平の言葉は拓海にとつては痛いものだった。現実世界では『レジスタンス・オンライン』の情報が極々と限られた者しか得られなかつたがプレイヤーの実名とレベルがわかればその人が最前線にいるのがどうかは分かつてしまう。

ゲーム内でトップクラスのレベルを誇つていることは、それだけ強い敵、この場合は命の危険がある相手と戦つているということ。そんなことを危険なことを繰り返すことはあの幽閉された仮想世界ではクリアする為以外に有り得ない。

つまり、拓海は常に命の危機に身を置いており、それを家族は知つていたということになる。

拓海としては一刻も早く現実に戻りたいという一心がそつとせたのだろうが、家族にとつては堪らない。

それはいつ、どこで、なにしてようが唐突に拓海の死という現実

を突きつけられても不思議ではない日常に身を置いていたのである。

それは他の被害者の家族にも言えることだろうが被害者のレベルが低ければ安全な場所でクリアを待っていると推測でき、大きな変事でもない限りは大丈夫といえた。

拓海の家族はそういうた安心をすることも許されないまま1年近くを過ごしてきたのである。

被害者に近しいものの心境としては一刻も早い救出を望む反面、被害者自身には脱出の為の努力をして欲しくないという奇妙な心理ができてしまっていた。

それは過去だけのことではなくなってしまっている。

そして、今回は最悪なことにその変事が起こってしまっている。今まで安心できていた低レベルというステータスが逆に危険度を悪化させる事態となつて。

悪夢だろ。被害者にとつてもそれに近しい者にとつても今までは確保されていた安全がなくなつただけではなく、最前線以上の危険がつきまとつているのだから。

「私はゲームのことにあまり詳しくはないのだが、話を聞く限り前の拓海以上の危険が付きまとつている被害者が沢山でているということだろ。それは非常にまずい事態だ。拓海の時も私や夕実の心労はとてつもないものだった。それ以上となると……」

そこで言葉を詰まらし難しい顔を作る宗平に変わり、夕実が話しあ出す。

「拓海は行くつもりは無いんでしょう?」

「うん。もう、行かない。行きたくない」

問いかけに迷うことなく答える拓海に対して夕実は満足げな表情を浮かべた後にすぐに表情を引き締める。

「でも、周りはきっとそれを許さなくなる。私たちにとっては拓海が大事だけ。他の人に取つたら自分の大切な人を守る為にかかるのは他人の命になるの」

夕実が喋ることに対しても思わず拓海の背筋がぞぞぞと震えた。正しいことだろう。たとえ、助けを求めてくるのが知り合いだろうが、その知り合いは自身にとつて大事な人の命がベッドされたゲームをすでに味わっている。その勝率を高める為に、命を守るために追加でベッドできるのは拓海の命だけ。

「時間が経てば経つほど、救出を望む声は大きくなるだろう。被害者が出れば出ただけ救出を望む声は大きくなるだろう。それが出来る可能性があるのは極一部のひとであり、それが拓海なんだ。安心の為にその極一部が救出に向ればクリアできると自分に言い聞かせている人もいるだろ?」「うう」

「俺んとこの大学でもさ、最近話したこともないような奴から話しかけられることが多くて。その内容が全部が全部、拓海が被害者だつたつてことを聞きつけて、助けに行つて貰える様に言つてくれませんか?的なことばっかなんだよ」

「そんな……」

家族から聞かされる話の内容に拓海の気持ちはどうんどんと曇り空が広がっていく。

「もちろん、ふざけんなよつて言い返してるけどな。それでも引かない奴はいるし、何度も何度も言つてくる奴だつてい。正直、本当にうんざりしてゐよ。思わず、3回目があつたらお前は助けに行けと言えるのかつて言い返したくなる」

怒り心頭と言つた表情をする文也の様子を見て場の雰囲気を変えようとしてか宗平が結論を口にだす。

「ともかく、だ。私たちは被害者の家族として新しい被害者の家族の心理状態はよくわかる。今はまだ大丈夫なのかも知れん。だが、1つのきっかけでそれは崩れる。人が拓海に強くすぐれば周りも同調してすがるだろうし、1人の被害者がでれば拓海を憎むものまでてくるだろう。なんで助けられる力をもつていたのに見捨てたのか、とな。私に言わせれば逆恨みもいいところなのだがな」

「そう、ね。私も拓海にもしものことがあればきっと警察にあたつていたわね。……今回の拓海の場合は救出の可能性が他の人よりもずっと高い分だけ、より酷くなるでしょうね」

「だから私としては転学して欲しい。少なくともここよりはそんな状態にはなりづらいだろうし、周りにいる学生も同じ境遇の子たちばかりだったら何かあつた時は味方になつてくれるはずだ」

「そうだな。拓海には悪いけど、いじで何かあつても俺らじゃ力にならぬねえ、と思つ」

家族の意見は1つにまとまっている中でも未だに拓海の心は決まりきらない。

今の生活を手放すことは嫌で、それでも同時に今の生活を続けるのは危険だということを周りが嫌になるほど警鐘をならしてくる。そして危険はすぐそこにまで迫ってきてるのは拓海も分かっているが、それでも今の生活には未練があり踏ん切りはつかない。

仮想世界の異変は拓海にとつて望まない状況を突きつけて、望まない選択を取ることを迫られる。それも悩む時間も選択を決断する時間も与えてくれず。

「…まあ、すぐには決められんか。ゆっくり考へろ、とは言えん。出来るだけ早く決めて欲しい」

「そうね。話を聞いた限りでは向こうはすぐに拓海を受け入れられるみたいだから、ギリギリまで家にいてもいいし」

両親はすでにここに残るところの選択肢はとつて欲しくないというのがありありと取れる言葉を発している。

拓海自身も頭の中では転学という結論はすぐそこにまで近づいてきているが、未練がましく今の現状がひょっとしたら続くのでないかと考えてしまっている。

それは希望であり、感情によって作られたここに残るという選択を取るために願望と言い換えてもいい。すがられる者である拓海がすがる最後の一線。

叶う事はない儂い夢。それでも、現実に周りが拓海にすがりついてくるまでは夢見てしまう。

「なあ、拓海」

「ん? なに兄さん」

「お前も急な話で困つてんだろうけどさ。お前一人じゃないんだろ? だったら、そっちにも意見聞いてみれば? 実際にどうなってるかも聞けるだろうし」

顔色が優れない拓海を氣遣つたのか、純粹に興味があつたのかはわからないが文也のアドバイスは拓海にとつては蚊帳の外に置いておいたものだつた。

いつもチャットしているプレイヤーに学生も多い。実年齢は知らない人もいるので高校生ではなく、中学生とか大学生とかの違いはあるだろうが置かれている状況としては大差ない。

拓海が転学を勧められたように他の元プレイヤーたちも転学を勧められている、ということはすぐに思いつく。

ならば、拓海と同じように悩んでいるだろうし、すでに結論を出した者もいるだろう。少なくとも今の拓海にはそういった

話を聞くのも決断を下すための重要な要素となりえた。

「ありがと、兄さん」

「どーいたしまして」

拓海は早速、チャットルームへと入るべく自室へと戻つていった。

チャットルーム

グアテマラ：よーするにこのままじゃやばいかも知れないから転校したほうがいいんだけど今の学校に未練があるつてことでおけ？

タク：そんな感じ。

グアテマラ：大人としての意見を言わせて貰つなら転校したほうがいい

えもん：僕もグアテマラさんと同意見。僕の周りの空気もピリピリしてる。

Kyo：俺んとこにもきた。

ユーリ：私のところも

グアテマラ：Kyoもユーリも学生だったけ。2人は決めたの？

タク：俺も気になる。

Kyo：俺は転校するつもり。こっちに戻ってきてから周りの連中のズレが辛い。

空猫：おつーKyo君もあたしたちの仲間入り？寮生活も悪くないよ（ ） b

ユーリ：わたしはまだわかんない

タク：いきなり言われても困るみな。

ユーリ…そうだね

グアテマラ：そんだけやばい状態つて事だろ？ 実際に仕事でかけるときには近所さんの視線が痛い

えもん：わかる。すぐ生活し辛い。

グアテマラ：いつも引っ越してしまいたい。でも、俺の帰りを待つてくれた仕事仲間のことを思つとそれも…

えもん：普通は首切られてもおかしくないのに……。僕みたいに。

グアテマラ：まあ、今はタクのことだよな

空猫：露骨な話題変換…………（ ） しきりあー

タク：やつこいつにしておきますよ。で、やつぱし転学ですか…

えもん：うん、そうだね。多分、世間から見たら僕やグアテマラさんみたいな大人のプレイヤーの方が風当たりは強いと思つ。ただ、学校つて場所だと危険。

空猫：どゆこと？

KYO：感情的に動きやすいくつてこと。

ユーリ……？？？

Kyo：大人に比べて衝動的に俺らに強く当たつてくる可能性が高いって事。あと、組織立つて当たつてくれる。

空猫：うわあ（……）

ユーリ：それはちょっと辛いです

タク：俺んとこもやうなるかな？

Kyo：なるなる。つーか、タクみたいな例の方が少数派。

タク：そつも掲示板のぞいたけどやっぱそうか。

Kyo：助けてくれる友達マジ感謝。

グアテマラ：掲示板といえばこの話題出てねえよな？ふつーは出でこねえか

えもん：多分、まだ伝えられてないんじゃない？拠点のことだつて昨日のことなんでしょう。優先的に魔王討伐組みに知らせたんだと思う。いうこう状態になつたら僕らへ影響は他のプレイヤーより遙かに多いし。

タク：かも。

グアテマラ：俺もそつも想ひ。わざわざ会社ここまで訪ねてきたし

タク：いつそ拠点に引きこもっていればこんな悩み無かつたのに。

ユーリ：そんなこと言わないでトセー

えもん：魔王戦はギリギリだつたんだから。一人でも少なかつたら全滅してたかもしれない。

KYO：タクが引きこもつてたら、今の生活もなかつたかも知れないんしな。

タク：うん、「めん。ちょっと弱気になつてる。

空猫：比較的安全地帯にいるあたしが言つのもなんですけど頑張つてだ（@< 。 ）－

えもん：話を戻すけど、逆に周りの反応がそこまで酷くないから、実際に大丈夫なんじゃあとか考へちゃう訳だよね？

KYO：あーなつほど。俺なんかすぐこの状況が想像できたもん。

タク：そう…かな？

えもん：多分そう。実際にタク君より周りの状況が酷いKYO君が納得してるし。

グアテマラ：今の生活が氣に入つてのもあつて、余計に想像しにくいんだろうな

ユーリ：生活が変わるのが怖いつてのもありますよね

タク：確かに。今的生活が気に入ってるし、それを壊してまで保身にほしめる必要があるのかつて思ひはあるような…。

空猫：「いつ来るなら歓迎するよ～うふ (* - -) v

タク：いや、行くなんて一言も。

空猫：Kyo君も来るんだしタツくんもおいでよ　あ、もちろんコーリちゃんも“へ(。 。 *) オイデオイデ

ユーリ：わたしもですか？

えもん：そうだね。出来れば、転校した方がいい。

ユーリ：考えときます

グアテマラ：タクも転校した方がいいんだが、すつきりしないならもつ2、3日通つてみればいい

Kyo：いや、まずい事になる。

グアテマラ：下手に心残りを残すよりはしっかりと現実を味わつてからでもまだ大丈夫だる。……多分だけど

えもん：確かに、タク君のところは比較的だけど話を聞く限りでは大人しい反応だと思う。でも、楽観視は危険だと。

タク：俺としてはやつぱし、今的生活が気に入ってるしこのまま転学しても絶対にすつきりしないし、感情的に納得できない。

Kyo：碌な事にはならぬ、とすでに碌な事になつてない俺が忠告つとく。

Taku：ありがと、Kyo。でも、せっぱり残つてたい気持ちが強い。

えもん：わかつたよ。でも、せっぱり心配だから明日もチャットにて報告して。

Taku：それはもちろん。今日は相談に乗つてくれてありがと。

俺はチャットルームから出ると同時にネットの中での名前であるKyōから現実世界の住人である折戸恭子おつど きょうこへと戻る。

ネットの世界でのわたしは俺であり、現実世界での女ではなく男であった。

チャットルームからみんなが居なくなつた後も1人で誰も居なくなつてしまつているチャットルームの画面を見続ける。こんな癖がついたのいつからだらうと思ひ返せばすぐに最初からだつたと思い出す。

最初にネットで男の振りをしていたのはほんの出来心からだつたのに気付けばどこに書き込みをするにも、男の振りをするようになつていていた。別に、男に生まれたかつたということじゃなく、少し女性じゃない扱いに新鮮さを覚えたのかも知れない。

自慢じやないが、わたしは容姿に恵まれている自覚がある。周りの男の子のわたしを見る視線で嫌でも気付かれる。

だけど、男の子のわたしに対する対応が友達に対するものじゃなくて、気になる異性の興味を引きたいつていう感じのものばかりには辟易としていた。

だから、少しだけ女の子扱いされたくない気持ちが生まれてきて、それでも現実ではそんなことされるはずがない。でもネットの上では性別はわからない。

そんな思いがそんな出来心を生んで男の振りをして書き込むきっかけになつたのだろう。最初の頃の書き込みなんか結構酷いものがある。

例えばとりあえず語尾に『ゼ』をつけとけば男の子っぽいとか思つてどの書き込みも無理やりと『ゼ』で終わるように文章を考えていたりした。

明らかに不自然でそんな昔の書き込みをふと思い返して除いてみたりして、それが残つていると恥ずかしくて堪らない思いをする。

そんな生活を続けていくうちに自然と男らしい文章、表現の仕方、反応なんかを覚えていくのは学校の授業よりもよっぽど面白かつ

たし、自分が成長したみたいで嬉しかった。

男の子の振りを続けていて次に興味を持ったのはVRMMOだったのは自然の流れだつたのかもしない。五感体験型の大規模オンラインゲームの中ではわたしは男の子で姿の中でゲーム始めた。それは今までの生活とは全く違つた生活ではあつたが、わたしにとっては新鮮であり、現実では味わえないことがあり、何よりも楽しいことだった。

わたしがVRMMOにはまるのには時間がかからなかつたし、ネット上のわたしではない俺ともいえる存在である『Kyo』はその時に生まれた。

けれども、わたしにとつてVRMMOで男の振りをしてプレイするのも趣味であり、息抜きであつたその一線を越えることはなかつた。

そう、『レジスタンス・オンライン』の事件が起きるまでは。

1年にも及ぶVR世界での生活をわたしではなく、俺で過ごしたわたしは現実に戻つても俺が抜けきらなくなつていた。それまでは仮想世界からのログアウトは俺から私へのシフトチェンジであつたし、スマーズに行われていたが、1年も俺であり続けたわたしはログアウトをしても昔のわたしではなかつた。

一言で言つと不快感。1年間男であつたわたしは1年の間同時に異性の女の子扱いされていなかつたことで、久しぶりにさらされたその視線にわたしは途方も無い不快感を感じた。

知らない相手ならばともかくなまじ知つていて、『心配したんだよ』とか下心丸見えで言つてくるのが余計に不快感を増させた。

だからだろうか、苦労して元の学校に復学したあとも馴染みがない感覚にとらわれ続けているのは。

そんな環境で暮らしていくのは非常に精神が疲れることがだが、それでもわたしにとつての現実だということは理解しているし、生きていく上ではきっとついて回る問題と元に戻ったとはいえない生活を続けていた。

それが変わったのはアゲインの事件が起きてから救出隊の噂が立つた時からだつた。

わたしにもう一度行けどばかりに強く当たつてくる女子が出始めたのはわたしが気に入らないということからだということは十分に承知している。

容姿せいもあり、現実世界へと復帰したわたしは学校では一種のお姫様扱い的なものを受けていた。男の子たちからすればわたしは『レジスタンス・オンライン』という物語の舞台にあがつたヒロインなのでだろう。

そんな扱いはわたしにとつてちつとも嬉しくなかつたし、同じ学校に通つている女の子から見たら面白いものなどではない。

自然、救出隊の噂が出てからわたしを排除しようと女子は連合をくみ出した。

そんな状況の中で友達が守つてくれているのは本当のことだが、彼らがわたしに望んでいるのは友達といつ関係性でないことぐらいわたしにもわかる。

だからこそ今まで耐えようと思っていた生活が無理かも知れないと思つていた矢先に飛び込んできたのがアゲインにおける事件であり、わたしの転学の話だつた。

わたしがその話を2つ返事でオーケーしたのは当然のことだつた。

現実世界に返つてからも相変わらずネット世界でのわたしは俺であり、現実世界でのストレスも相成り、最早俺であることの方が自然だとすら思う日もある。

それでもわたしは女であることはしっかりと分かっている。だからこそ、わたしにとつて親友と言つてもいいレジスタンスの中で共に戦つた戦友たちに偽りのわたしで居続けるのに後ろめたさを覚える日が増えてきていた。

だが、それを明かしてしまえば今の関係ではいられないだろう。彼らとは実際に会つてみたい気持ちはあるが、それは同時にわたしを見せてしまうことになる。

今のわたしにとつてチャットルームは大事な場所であり、それを壊すようなことは決してしたくない。

転学先の学校でも空猫に会つても名乗れず、タクやユーリが転学してきたとしても気付かれないとどうし、わたしから教えることもないだろ？

実際に交流を深めたい気持ちは強いが、それもチャットルームが壊れてしまう可能性があるのならば現実において彼らの前にわたしが俺として現れることは絶対に無い。

それでも現実でタクがユーリが空猫が誰か分かつてしまつたら近づかずにはいられないだろう。それはわたしの心をより苦しめる。

親しき者と親しいのはネットの世界だけであるという現実を突きつけられて。

だから、わたしは会いたいけれども知りたくない。そんな相^{レジ}反した気持ちが転学に対する期待と不安を煽り続ける。

転学はわたしという人間にどういう影響を与える、どう変えていくのか、と。

変わりゆく日常

次の日の朝、拓海^{たくみ}は昨日のこと^{のことを}引きずつていなかのよう、いつもと変わらない時間に起床し、朝食を食べ、家を出た。

それは拓海にとつて1つで意地であったのかも知れない。手に入れた現実が自分から逃げようとしているのを感じながらも認めずにいるからこそ、せめて自分がいつも通りしていることが1つの防衛線となつているのだろう。

そんな風に装う拓海が家を出るときには夕実^{ゆみ}と文也^{ふみや}の心配そつな視線が拓海に向けられていたが、あえて気付いてない素振りをしたのは認めたくなかったからだろう。

宗平^{そうへい}は心配していないわけじゃなく、ただ単にすでに出社しており居なかつたというだけのことだ。証拠に家を出る前に『今日は休んだらどうだ?』と拓海に訊いている。

だが、拓海は学校へと行くことを選んだ。確かに政府から『R.O.A^ア』での異常は発表されたが、まだ直ぐに急激な変化は起ころまいと楽観視しているのもあつたが、何よりも拓海自身が日常が変わらないように望んでいたことが大きかつただろう。

だが、拓海の目算は甘いと言わざるを得なかつた。10万を超える被害者を出しているこの事件の続報にどれだけの人が注目しているかなど少し考えれば分かるもので、例え噂程度のものであろうとも人伝で世間への浸透には時間がかかるない。

ただそれも仕方の無いことだった。前回の犠牲者である拓海については忌避するべき事件である以上は積極的に関わりたくないことで、自然と耳に入れないように話題なのだから。

その日の登校途中に拓海に向けられた視線の数はいつもより多く、込められる感情も強くなっていた。

しかし、拓海はそれを昨日の話を聞いたからそういう風に感じているだけだと自分に思い込ませて、いつも通りのペースで通学路を歩き続ける。

いつもはちりっと目を向けてくる近所のおばさんが拓海の姿が見えなくなるで視線を送り続け、見えなくなつたら1人、2人と集まつてきて井戸端会議が開催される。

隣近所の話題やテレビがどうたらと見つたことを話しているおばさんたちの今日の話題は拓海のことであり、その話題の熱が冷めるのはしばらく先のことになるだろう。

もつと細かに言うのならば、巷を騒がすROAの新しい情報がもたらせたからあり、おばさんたちにとっては最も身近で話題にし易いのが拓海であつたというだけのことであつた。

ただし、それでも拓海はまだ恵まれているのだ。もし、近所のあばさんの知り合いに被害者がいたのならばもつと酷い状況になつているに違いない。

しかし、学校ではそうはいかない。幸いにして、未だ死亡者こそ出ていないが、VR世界へと囚われている被害者はでているのだから。

校門の前には昨日と同じ様に正樹^{まさき}が立っていた。

「…………よお
「おはよ」

何かを切り出したそうな話しかけ方をする正樹に対しても拓海は朝の挨拶を返す。

「…ニュース見たか？」

何のニュースかは言う必要がない。今この場で拓海を待つてまで聞こうとするニュースなど1つしかない。

正樹の顔色が優れないのは妹の身を案じていることの表れだった。正樹と妹の仲は良好といってよく、拓海も正樹の家に遊びに行つた時に知り合っている。

言つなれば、拓海も軽度ながらも知り合いの安否を気にする日常生活を余儀なくされているが、より近い分だけ正樹の心の負担はより大きいだろう。

「…見てない」

少しの躊躇いの後に拓海が口にしたことは嘘ではない。実際に拓海はニュースを見ていない。

だが、正樹の問い合わせの正確な意味は『現状を知つてるか』というものでそれに対する拓海の答えはイエス以外は有り得ないのだが。拓海はあえて質問の意味を正面からとつてそれに対する事実だけを告げることを選んだ。ただの屁理屈であろう事は拓海自身も気付いているが、それでもこの後の話の流れを考えるに拓海にとっては素直に頷けないことだったのだ。

「そう、か。…でもよ、知つてはいるんだろ」

思わず、びくりと拓海の体が震える。それは後ろめたさからのか、触れて欲しくない話題だったからかは分からぬが、拓海の動

瑠は顔へと現れていた。

「一応、中学からの付き合いだ。それぐらいはわかる」

そう言つた正樹の顔は朗らかさすら浮かんで見えるがその声から余裕といつもの微塵も感じられなかつた。それだけ今の現状は不味いといふことを理解しているのだらう。

「それで、よ。経験者としてはどうなんだよ? 実際にプレイしたことの無い俺じゃあ、今の状況がヤベエってことぐらいしかわからんねえ。けどよ、拓海なら違つだろ? 少なくとも俺よりは詳しく分かるよな」

拓海が正樹の言葉から感じられた感情は懇願。妹の危機に何もできない自分の愚かしさを呪つたかのように沈んだ顔色と聞き取りづらい声だった。

そんな正樹の言葉は拓海から救いの言葉を待つてゐるのだらう。『まあ、騒ぐほどでもないことだ』 そんな樂観的ともいえる希望の言葉を聞きたかったのだろう。

「……6分の1の確立だ」

「は?」

「6分の1の確立、と言つたんだ。つまり、残りの6分の5に属している可能性の方がよっぽど高い」

拓海から出た言葉は救いを貰えるものではなく、可能性に望みを託すものでしかなかつた。

日本国民 厳密に言えば、すでに世界が注目しているが 知らせれたのは漠然とした状況の悪化でしかない。

事態が悪いほうに傾いたということは分かつても報道された情報

だけでは分からることも多々ある。

それはニユースを見た一般人だけではなく、実際に事件の対応に当たっている人でさえわからないことだ。

今現在において知りえる情報から最も正確な未来を予想しつるのは間違いなく拓海を始めとしたR.O.A^{ロア}のプレイヤーたちであろう。とはいえ、続編であるアゲインにおいてどこまでその知識と経験が当てはめられるかは定かではないが、それでも現状の把握にかけては担当者よりも分かつてているのは確かのことだつた。

そして、その知識と経験が紡ぎだした答えは口に出すのをばかれるものであり、だからこそ正樹の問いに對して逃げるかのような答えしか返せなかつた。

嘘をついてしまえばそれで全てが終わる。正樹の心配は取り除かれるとまでは言えなくとも、朝ニユースを見た時よりもはるかに楽な気持ちでいただろ？」、拓海にとつても正樹からの追求はなかつただろ？。

しかし、拓海は嘘をついてまで正樹を安心させることを選ばずに真実を口にしたのは純粹に妹を思つ親友の姿を見て思つものがあつたからだつた。そして、漠然としてだつたが隠しても隠し切れないことの様な気がしていたのが決定打となつていた。

「じゃあ、じゃあよ。もしその6分の1に当たつてしまつてたらどうすんだよ？どうなるんだよつ！？」

「……」

拓海の答えは沈黙。それは応えるべき答えを持つていなかつたらではなく、過去の忌まわしき記憶を引き出していたからだつた。ゲーム開始とともにプレイヤーがランダムに配置される出発点。その場所は安全を確保なはずの場所であり、安全を確保されるべき場所のはずだつた。

しかし、このゲームでは違つていた。最初の場所ですらプレイヤ

一へと牙をむく場所へとなりかねない。

そして、実際にその問題は起きてしまっている。前回は起こらなかつた事態だが、それがもたらす結果は拓海が思っていたよりも早くたどり着き、自然と口に出てしまっていた。

「本当の意味でのデスゲームが始まる」

「……は？」

口にしてからじまつたと拓海は思つ。幸いにして正樹に意味が伝わっていないのを見て内心ほっとする。

拓海を始めとした一部のプレイヤーたちが考えていた1つの疑問がある。

それはROA^{ロア}は始めからデスゲーム 24時間ログインしているのを前提にしたゲームではないかということだ。

そして、それは悪夢のゲームを終わらせようと最前線で戦い続けたプレイヤーならば誰しもが一度は考えたことがあることでもあった。

特に未攻略のフィールドにおいてはそれが顕著であり、モンスターの出現率、索敵範囲の狭さ、マップの広大さなど原因となつて攻略の妨げとなつていた。

ボスキャラクターを倒せばモンスターの出現率も減り、索敵範囲も広がり、馬車などの移動手段も使えるようになり問題という程でもなくなるのだが。

フィールドの攻略に乗り出していたプレイヤー曰く、『ボスキャラクターの討伐よりも野喰の方が辛い』と皆が口を揃えていた。

それこそ未攻略のフィールドを攻略しようと思えば、パーティメンバー全員が同時に休むということは出来なかつた。

魔王討伐に参加したあるプレイヤーの『これがデスゲームじゃなかつたらきっとクリアされることはなかつた』という台詞には拓海も深く頷いたものである。

簡単に言つてしまえば未攻略のフィールドとは24時間ぶつ続けの緊張を強いられる場所であり、ROA^{ロア}での現状はそれと全く違つては語弊があるが、それに近しいものと見て間違いなかつた。

状況だけで言うのならば余計に悪い。常にそういうした場所での戦いをしている者ならばともかく、6つある最初の都市の1つがフィールドなりえたことは戦つことを選ばなかつた者、逃げた物、攻略済みのフィールドにしか足を運ばない者たちを強制的に24時間常に戦いの危険が付きまとつ安らぎの場所すらないゲームへと参加させる。

中川^{なかがわ}の話では近くの町がプレイヤーによって解放されているようだからそこまで行けば問題はなくなるだろうが、戦わずに初期レベルのままのプレイヤーの内どれだけがそこにたどり着けるかは疑問が残る。

「いや、なんでもない。俺の時には起こらなかつたことだからな、どうなつてるかなんて分からん」

先ほどの言葉を正樹が理解していないのをいい事にはぐらかす様な答えを拓海は吐き出した。

それは当たつて欲しくない未来しか考えられない思考から拓海自身が逃れたいが為の答えでもあつた。

「…………そつか」

答えをくれぬ拓海に対し失望の色濃くうなだれる正樹。

そんな正樹を前に拓海はかける言葉を持つていなかつたのは、気休めの言葉が思いつかないわけではなく、仮想世界を現実として味わつた者としてその言葉が簡単に吐けるほど軽いものではないと知つていたからだつた。

昨日よりも事の成り行きを見守る生徒の数が多い中で、正樹の瞳

は不安に揺れ続けていた。

改訂のお知らせ

題名の通り、申し訳ありませんが大幅な改訂をさせていただきました。

理由としては感想の方でこの小説の初期設定の同じゲームの2度目の発売と人気に疑問があるという意見を結構と頂いてしまったからです。

まず1つ目の同じゲームの発売という2度目の発売という点に関してですが、まず一度目の事態でゲームの管理は会社の手を離れる。または、会社自体が倒産してしまったとの意見を頂いています。

2つ目の人気については、安全が確認されていてもそんな事例があればやろうと思わないという事です。わかりやすく言えば、中国産の冷凍餃子がまた発売されても安いからといって買う人は少ないといったところでしょうか。

実際、私が書きたいと思っているのは2度目の「デスゲーム」への向うまで、というのと知識と経験を持つて遅れた状態からのアドバンテージを持つてのゲーム参加からの「デスゲーム」の攻略というわけなんですが。

それを書きたいあまりに前段階の上記の点については深く考えていなかった、という事実は否定できません。

最初に意見を頂いた時は続きを書きながらも、上記の訂正は納得できるような理由を思いついたときに思っていたのですが、思つていた以上の方にその点が気になるという指摘を頂きました。

具体的には感想をくれる人の3分の1くらいですかね？単純計算で3人に1人が最初の時点で設定に納得できないというのは書いてる方としても問題だと思つてしまつわけで。

ありがたいことに最新話を投稿した後からぐぐーんとアクセス数、お気に入り登録数も増えて：簡単に言つてしまえば新しい読者様が増えていたことになります。

だからこそ、上記の点が気になり指摘してくれる方がいると思うと、それ自体はありがたいのですが、そういう感想を頂くたびに続きを書くよりもそこをまずどうにかした方がいいんじゃないかなと、いう思いが段々と強くなつてきました。

この一週間の間もどういう風にしたらより自然に私の書きたい物語の背景を作れるか、読者様に納得してもらえるような背景はどういうなものかと考えてきましたが、残念ながら思い至らず。

とは、言つてもとっかかりのようなものを掴み始めてはいます。私の中でVRMMO幽閉モノの小説のおおまかな原因としては4つほど考えています。

1つ目が人為的なもの。簡単に言えば、ゲームを作った人がその段階でプログラムを仕込んだ。あるいは、ゲームを管理する人が……。と言つた感じです。

この場合の利点としては人の意思によるものなので、デスゲーム内でルールが細かいものとなつていても納得しやすいというんですね。

反対に難点としては、その犯人自身が外からのゲーム解決の糸口になつてしまふことでしょうか。

それと、反抗の動機付けなどの問題もあがつてきますね。

2つ目は上の応用ですが、ゲーム自体に直接関わらずにウイルス

を利用したもの。簡単に言えば、外部からのゲーム情報の書き換えですね。

この場合の利点としては安全性が確認された後の出来事ということに納得できるということでしょうか。

反面、外部からの情報書き換えでそこまで細かい干渉は難しいといふことですかね。書き換えではなく、乗っ取りならば出来るのでしうがその場合は常にゲームとネットで繋がっている必要があるので、警察の手を逃れられるとは思えない。

3つ目はAIの暴走。これも結構ありがちな設定ですね。
利点は、外からの解決方法が少ないと、細かい対応がしやすい点でしょうか。

ですが、AIだからこそ、人間っぽい考えがどこまで許されるのかという疑問もあります。

4つ目は事故。

問答無用でゲーム世界に送り込める半面、完璧に細かい融通が利かないという問題が。

と、まあそんな感じがぱっと思いついた感じです。あとは上記にあげたものをいじくりつつ納得できるような状況を作るわけですが。少なくとも4月中にはしつかりとした理由付けをして投稿したいとおもっています。というか、意地でもします。

さて、改訂の方法ですが上記の理由付けを序章として割り込み投稿して、その後に現在投稿している話を序章での設定を元に改訂していくという形にしようと思っています。

正直、現在投稿している話の内容はほとんど変わらないと思いま

す。

さて、長々とここまで読んでくれてありがとうございます。

最後に感想を催促するような形になってしまいますが、少し意見を頂きたいことがあります。

この作品についてですが、電撃文庫様より発売のSAO様にかぶつているとの意見を頂きました。

デスゲームものを書いている以上は言われるだらうな、とは思つていたことなのですが皆様にとつてどう感じるものなのでしょうか？人によつてはデスゲームものを書いている時点でアウトだという人もいるだらうとは思います、できればデスゲームものという点と舞台がVRMMOということとトッププレイヤーという3点以外でここは似過ぎで気になる、という点があれば教えて欲しいです。ついでに似ているけどこれぐらいは大丈夫、という意見も下さると助かります。

しばらく投稿していなかつた上にようやくの投稿がこの様な内容で申し訳ありませんが、これからもよろしくお願ひします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4443r/>

DEATH GAMEをもう1度

2011年6月11日09時18分発行